水中に溺るゝ如き手つきして
頭のあらぬ偶像をだく

Ⅰ（単行本第一巻相当部分）

0頁1-2「水中に・・・だく」：0　単では、その前の頁の「第一巻」とともに色刷り（セピア色）。⇩補注1。

1頁1「一」　新「一の一」～「一の四」に相当。

題字カット（1）　題字カットの更新は計4度。このカット（1）の使用は「一の一」～「一の四」の4回のみで最短。〈ほぼ原寸大。以下同様〉

2　**新「一の一」（一月一日）**第1行に相当。

2-3「日が落ちて・・・着いた。」：「東海道線の下り列車は途中で故障を生じて、一時間余りも延着することに成つた。岐阜駅へ着いたのは、日が落ちて空模様の怪しくなつた頃である。」

2「成つた」：岩「なつた」　岩での改稿として、「成る」を「なる」に替えることはほぼ一貫しているので、以下では特に必要性が認められないかぎり注記しない。

3「岐阜駅」　設置当初（明治20年）は元町にあって「加納駅」と称したが、21年にやや南の長住町（現・十六

1

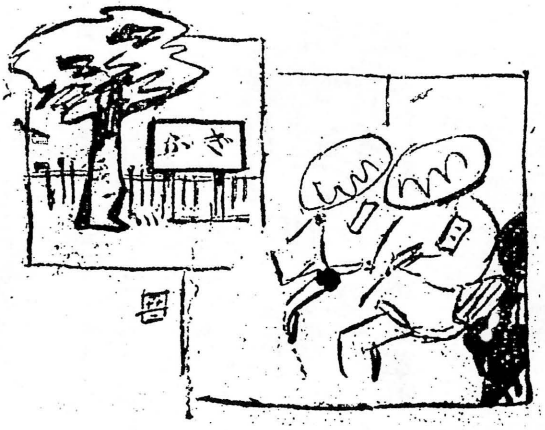
一

日が落ちて、空模様の怪しく成つた頃である。東海道線の下り列車は、途中で故障を生じたので、一時間餘りも後れて岐阜驛へ着いた。車掌が「ぎふ、ぎふ」と呼びながら、一つ宛車輛の戸を開けて行く。其後から、乘客は雪れる樣にプラットフォームへ降りて、先を爭つて線路の上に架けた橋を渡らうとした。

小島要吉は三年振りで此停車場に立つた。今頃故國の土を踏まうとは昨日迄も思つて居なかつた。去年の夏大學を卒業した時でさへ、歸省して見やうなぞと云ふこゝろは起らなかつた。小さい時から都へ出たが、いろ／＼因由が有つて、故郷へは歸らない。一生歸りたくない。天が下に自分の生國といふものが無ければ可いと思ふことさへあつた。それが今度止むを得ない事情で、突然歸つて來て、早くも聞慣れた土音を耳にし、見慣れた風俗を眼にすると、幾許永

銀行本店あたり）に移転して「岐阜駅」と改称。大正2年にさらに南西へ再移転して現在地となるまで、その位置にあり、『煤煙』に描かれているのもこの時期のもの。⇩地図1、2（*14*、*15*頁）。

挿絵（1）：新「一の一」（一月一日）掲載のもの（以下、〈：「一の一」（一月一日）〉のように略記する。ほぼ原寸大。以下断りのないかぎり同様）。



＊　挿絵は名取春仙が担当し、新聞にほぼ毎回掲載された。きわめて好評で「新聞小説挿絵界の革命」といわれ（清水三郎。荒正人『漱石研究年表』503頁に拠る）、第一回の紙面を目にしての作者草平の感想にも、その「スケッチ風な

2

く他國に放浪して、自分だけは他所の人間に成濟したつもりで居ても、矢張此處の土と水とで出來た人間だなと云ふ感じが餓に強く成つた。要吉は妙な心持に成つて、一番後から橋架を渡らうとしたが、偶と便所の側に、兩人の繩附が巡査に連れられて、竹の子笠を被つた儘立つてゐるのが眼に着いた。外の乘客が通り過ぎるのを待合せて居るものらしい。何處から護送されて來たものか、一人は人相の惡い老爺で、ぢろ〳〵と前を通る人の顏を眺めて居たが、最一人は肩の瘠せた女で、流石に俯向き加減に成つて面を見せなかつた。思はず足を留めた途端に、顏を上げた女と眼を見合せた。二十四五の色の惡蒼い、白眼の勝つた女であつた。固より知らぬ女である。要吉に只斯う云ふ者を見た時に誰もする可厭な感じがした許りで、其儘通り過ぎた。改札口で切符を渡して居る時、直ぐ自分の背後から其兩人が續いて來るのを見た。

荷物を受取るのに頁暇取つて、人力車を雇つて駈出した頃は、町の見世に燈火が點いて居た。路側に柳を植ゑた八間路といふのを眞直に駈けさせると、間もなく芝居小屋の幟だの看板だのがごた〳〵して、人通の劇しい十字街へ出た。其處を突切つて、滑川に沿うて行くと、暫く、監獄の塀手に成る。高い黑板塀の角で、又繩の繩附を見かけた。風に吹かれながら腰繩を打た

挿画も気に入った」とある（『漱石先生と私』〈以下『漱石』と略記〉下、75頁）。

4「呼びながら、一つ宛」：新「呼びながら一々」：岩「呼びながら、一つづゝ」

4「行く。其後から」：「行く後から」

4「プラットフォーム」：新「プラットフヲーム」：岩「プラットホーム」

6「小島要吉」　＊　前年（明40）12月1日から31日まで、毎日に近い頻度（23回）で同紙に掲載された「小説予告」、「新年小説予告」などでの謳い文句「森田文学士、空前の活小説」（⇩補注2）などからしても、この小説の主人公を前年3月、情死未遂事件で新聞を賑わした「森田文学士」その人として受け取ることは、圧倒的多数の読者にとって自然であったろう。その森田が岐阜出身者であることも報じられていた（名古屋に本社を置く『扶桑新聞』〈3・28〉は「恋の奴隷森田文学士／＝森田は岐阜県人＝／＝奇妙なる遺書＝」と見出しにも謳った）から、ここで「小島要吉」として現れた人物が作者森田草平自身に重ね合わせて読まれるであろうことも自明で、作者はもちろんそれを意識していよう。

6「三年振りで」　＊　物語上の現在が明治40年であることも多数読者に自明で（⇩前注）、「三年振り」は37年以来ということになるが、草平自身は「大学三年間帰省しなかった」のち、39年夏に帰省したと書いており（『漱石』上、187頁）、現実から1年後らせる形でストーリーを作っ

3

れて、巡査の前をとぼ〳〵と歩いて行く。要吉は最一度好く女の顔を見定めたいやうな氣がして、草の上から振返つた。能くは分らぬが其女は懷姙してゐ樣に思はれた。外套の襟を立てゝ兩人は今夜何處で寢るのだらうと思つた。兩人は同じ犯罪で捕られて行くのか、それとも互に知らぬ同志で、偶一緒に護送されるだけか。同じだとすれば何んな犯罪だらう。放火か、亭主でも殺したのか。何れにしても込入つた事情がある樣に思はれてならぬ。又下らぬ妄想を始めたなと、自分で打消して見たが、今更女と罪惡とが未來永劫離れ難いもの丶樣に思はれて、慶り落ちさうな空模樣と一緒に、要吉の胸を壓し附けた。

要吉は自分の不行跡な生活を想ひ出した。去年の冬、かれて妻と極つた隅江を故郷から招び寄せたには寄せたが、女の身に成ると、却て招び寄せられない方が可かつたかも知れぬ。一日もほつと思つた日は無からう。それが此春腹の兒が出來たと分つた時、産をする爲と云ふので實家へ歸した。其後で要吉もほつと息を吐いた。隅江は實家で女の兒を生み落したと云ふが、生れた兒も弱く、自分もそれから三箇月にも成るのに、未だぶら〳〵してる相だ。當人からは只一日も早く快く成つて東京へ行きたいと云つて寄越した許りだが、母親のお綱からは是非一

ていることがわかる。⇩同頁7の注。

6「此停車場」：新「故郷の停車場」：岩「この」

岩での改稿として、「此」を「この」に替えることはほぼ一貫しているので、以下では特に必要性が認められないかぎり注記しない。

挿絵（2）：「一の二」（一月二日）

6–2頁2「今頃故国の・・・強く成つた。」

＊　この間の6文はいずれも主語（あるいは記述される心理の主体）を明記していない。前後の文の主語、「[小島]要吉」が一貫して潜在するものと見なせるが、連続6文にもわたる主語省略や、また「一生帰りたくない。」（8）という自由間接話法の挿入などの方法の選択は、そう思っている主体であるはずの「要吉」と語り手とが読者において

4

度歸れと幾度も云つて來た。それにお絹は又お絹だけで別に相談したい事が有るので、外でも無い、要吉の家に殘れ殘つた山林を抵當に金子を借りやうと云ふのである。お絹は平生の氣性にも似合はず、要吉に横突いて執拗く云つて來た。それには又それを云はせる者が有るので、要吉は其人と母と、引いては自分と三人の關係に想ひ到る毎に、常に咽喉を扼されるやうな心持がした。始めは手紙で間に合せる積りで居たが、周圍の紛紛した事情に堪へなく成つて、何事も一思ひに證切つて仕舞ふやうな了簡で、急に新橋を發つて來た。が、偖て此處迄來た上で考へて見れば、自分の樣な意志の薄弱な者が、面の當り會つた上で、何を爲し得やう、何を言ひ得やう。其結果は纏れた絲を一層縺れさせるだけに過ぎない。要吉はこの儘此處から引回へさうかとも思つた。

車は監獄の塞から寂しい町を幾丁か走つて、堤へ上つて、やがて長良橋へかゝつた。川風が寒い。石河原へ引上げた新造の船の横腹を蟻を焚いて燥して居るのが、橋の上から見える。長良の町端れから往還を左へ折れて、一里許り走れば、要吉の生れた村へ着くのだ。一筋の道が宵闇の中を仄白うつゞく。氣候が急に冷たく成つた所爲か、其邊の村々をそゝつて歩く若衆一

渾然一体化してゆくという効果を生じうる。特に意図しなかった可能性もあるが、ともあれ、これで『煤煙』の地の文の基調は確定したといえる。こうして小説のほぼ総体がこのような、要吉の意識と一体化した語り手によって語られてゆくことになるが、例外的に、語り手の視点が他の人物に入り込み、あるいは全人物を超えた超越的視点に立つ箇所もある。⇩18頁10–19頁4、162頁12–13、375頁11–377頁12の注、補注67。

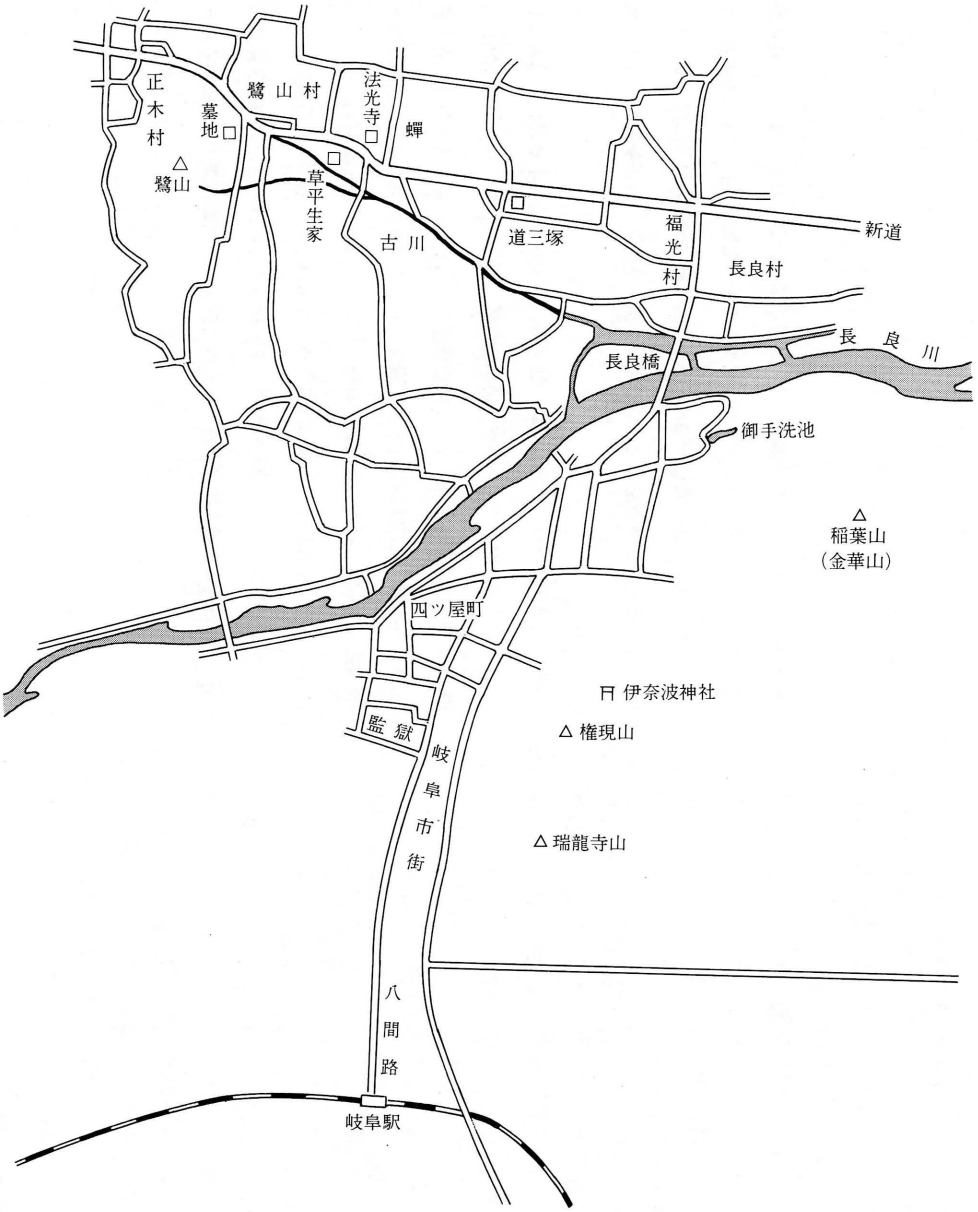
6–7「今頃故国の・・・居なかった。去年の夏」：「今頃こんな詫しい心持で、故郷の土を踏まうとは夢にも思つて居なかつた。一昨年後一箇年分の学資を拵へる為に帰つた切りで、去年」

7「去年の夏大学を卒業した」　＊　草平が東京大学を卒業したのは明治39年7月のこと。「去年の夏」を39年と見れば小説の現在は40年で、その後の展開と事実との符節が合う。ただ卒業の夏、久しぶりの帰省をし、田畑を売却して再上京している点、要吉と異なる（⇩根岸正純『森田草平の文学』〈以下『森田』と略記〉30頁）。

7「見やう」：岩「見よう」　岩での改稿として、それまで「やう」と誤記されることの多かった助動詞の「やう」が「よう」に統一された。変更は一貫している（例：4頁2の「借りやう」は「借りよう」に）ので、以下では特に必要性が認められないかぎり注記しない。

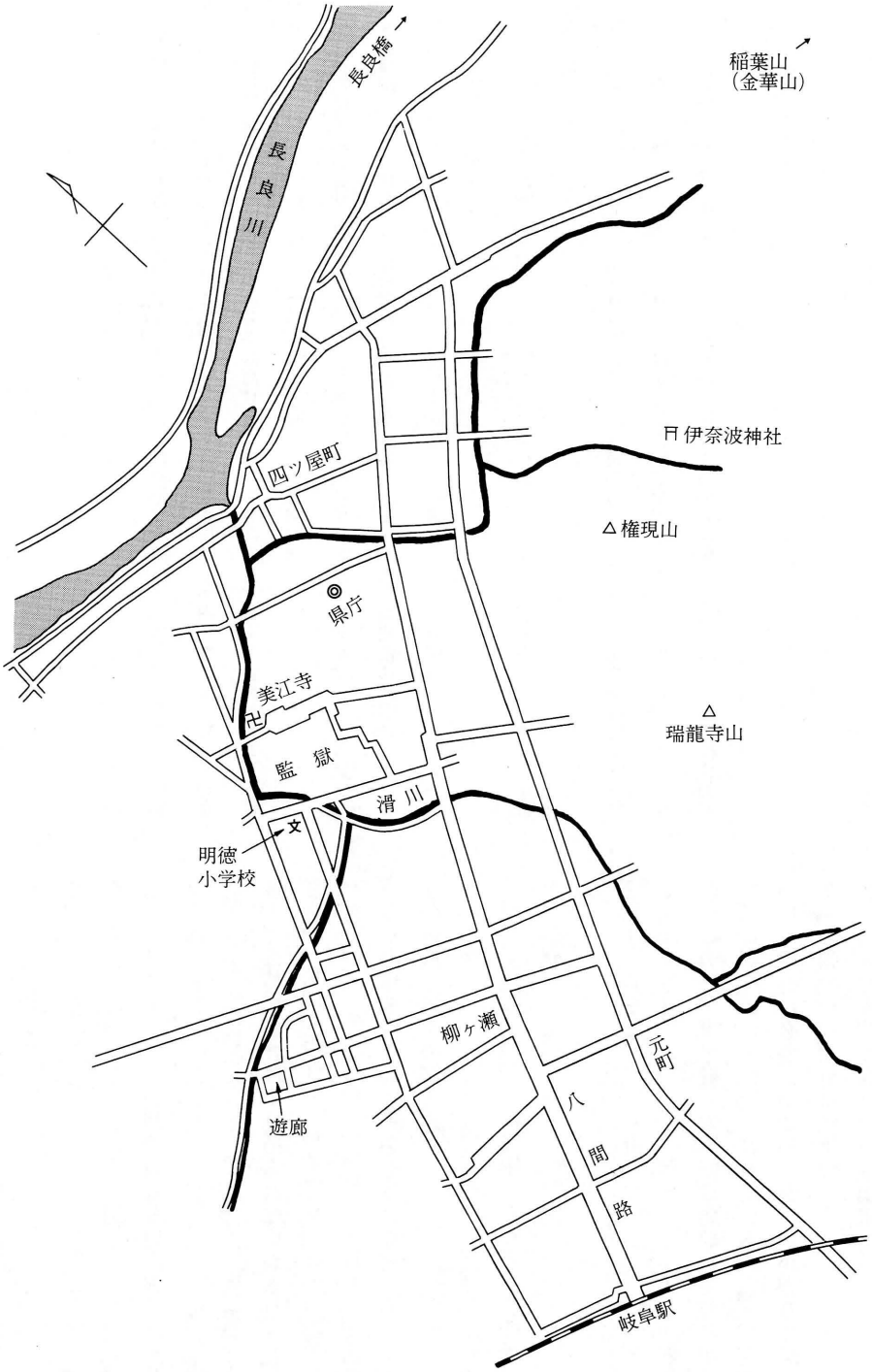
7「こゝろ」：明・岩「心」

8–9「小さい時・・・さへあつた。」：「東京の荒んだ生



地図1

（明治40年頃の地勢にもとづく略図。地図2も同様）


長良橋
長良川
稲葉山
（金華山）
伊奈波神社
四ツ屋町
権現山
県庁
美江寺
監獄
瑞龍寺山
滑川
明徳
小学校
柳ヶ瀬
元町
八間路
遊廓
岐阜駅

地図 2
（岐阜中心部）

人にも出會はない。人力車の輪が轟々と轟く。要吉は帽子を眉深に冠つて頭垂れたまゝ、何處を如何して來たとも知らない。村の取附の水車小舍で、杵の音が耳へ這入つた時、始めて眼を覺した樣に頭を上げた。人力車の輪音を聞附けて、犬が小舍から走り出して吠え始めた。其處から二町許り行つて、用水の上の土橋を渡ると直に生れた家だ。

要吉は門前で車を降りて、潛りを押さうとしたが、分銅の工合が惡くて開かない。扉に凭れたまゝ少時躊らつた。何だか自分の家へ戻つたやうな氣がしない。知らぬ他國に行暮れて、一夜の宿を借りに寄つた樣な心持である。そしてる間に中から扉を引いて、弓張提灯を持つた五十近い女が顏を出した。

「まア要さぢやないか。餘り遲いで、今與三松の宅へ訊きに出かける所ぢやがな。さあ早うお這入りなんしよ。」

扉に片手を掛けたまゝ、お絹は身を開いて要吉を通した。要吉は一寸母親の顏を見て頷いた許りで、默つて潛りをくゞつた。車夫が後から革鞄を兩手に下げて這入つて來た。

お絹は一寸門外を見廻したが、追ひ縋る樣に蹤いて來て、「與三松は如何した、あれは如何

5

活を続けて居ると。段々そんな心持は無く成つて、此分で行たら一生帰る時機はあるまい、自分だけは生れた国と絶縁した位に思つて居た。」

8「因由が有つて、」：岩「わけがあつて、」　「有る」を「ある」に替えることは岩に関しては一貫しているので、以下では特に必要性が認められないかぎり注記しない。

9「無ければ」：岩「なければ」　岩での改稿として、「無い」を「ない」に替えることはほぼ一貫しているので、以下では特に必要性が認められないかぎり注記しない。

9–10「止むを得ない事情で」：「止むを得ない事事が生じて」　＊　母のお絹が持ちかけた「要吉の家に売れ残った山林を抵当に金子を借りようと云ふ」（4頁2）相談の処理を指すのだろう。

10「土音」　その土地の人特有の発音。『日本国語大辞典』（小学館、昭50）には用例として『煤煙』のこの箇所が引かれている。

2頁1「自分だけは」：0

1「居ても、」：岩「ゐても、」　「居る」と「ゐる」との使い分け、書き替えの事情は錯綜しているが、岩においてはほぼ「ゐる」に統一されている。以下、岩での改稿については特に必要性が認められないかぎり注記しない。

1「矢張」：「自分は矢張」

2「出来た人間だなと」：「出来てると」

2「妙な」：「変な」

6

したぞい。」

「え、與三松？知りません。」

「ミア停車場まで迎へに遣つたのに。屹度入込でうろ〳〵して居て、見外して仕舞つたんぢやろ。」

「左樣でしたか、私も氣が附かなかつた。」

要吉は行儀よく並べた圓い石の上を母屋の方へ歩いて行つた。小さい平家造りである。湯を立てたのか、庇から煙がもう〳〵と立昇つて、ぱち〳〵と豆殼の燃る音がする。偶と見ると、一人の女が風呂桶の前に蹲がんで、肌を脱いだ兩の肩に濡手拭を一重かけた切り、小氣味よく發育した乳房の邊りをあか〳〵と火に照されて居るのが眼に映つた。足音を聞き附けて此方を向いた拍子に、黑い瞳子がぎちりと流れた。戸口まで立上つて來て、

「矢張要樣ぢやつたらうがな」と聲をかけた。

「あ、お倉か」と言つたまゝ、要吉は側を擦り通つて樣奥にどさりと腰を下した。

「與三松に會はんのぢやとさ」と、お鶴が張合の抜けたやうに言つた。

2「橋架」：岩「ブリッヂ」

3–4「両人の・・・眼に着いた。」：「竹の子笠を被せられた両人の縄附きが巡査に連れられて、外の乗客が通過ぎるのを待合せて居るのが眼に附いた。」　「竹の子笠」は竹皮笠に同じ。竹の皮をさき、編んでつくった被り笠。ここでは囚人用の笠。

4「外の・・・らしい」：0

4「何処」：新・単「何所」

5「ぢろ〳〵と」：明・岩「じろ〳〵と」

5「最一人は」：新「も一人は」：岩「もう一人は」

6「肩の痩せた女で、」：「痩形の婦女で」

6「加減に成つて」：「加減にして」

6「思はず足を留めた途端に、」：新「要吉は思はず足を留めた。其途端に」：明・岩「要吉は思はず足を留めた途端に、」

7「白眼の勝つた女」：「白味の勝った大きな眼の女」

8「斯う云ふ」：岩「かう云ふ」　「斯う」を「かう」に替えることは岩に関しては一貫しているので、以下では特に必要性が認められないかぎり注記しない。

8「誰も」：「誰でも」

8「許り」：新・岩「ばかり」　新で「ばかり」とかな書きしていたところを単で「許り」と漢字に替え、岩でもとに戻したわけである。こういう例は少なくない。新では広範な読者に向け、読みやすさに心掛けたものか（⇩367頁5–7の注）。岩での改稿として、「許り」を「ばかり」に

「まア何の事だ」とお倉は舌打して、「それに今頃迄何處を迂路々々してけつかるんだらう、あの鈍間めが」と、口汚なく罵つた。與三松はお倉の弟である。

「誠が行かんもんぢやで仕方がないわな。其間戻つて來るぢやろ」と、今度はお絹が取成す樣に言つた。

お倉は風呂の蓋を取つて、手を突込んで湯の加減を見て居たが、「要磔、直ぐお風呂へお這入りやして如何ぢやな、着替へんさる前に。」

「左樣ぢや、〳〵、左樣するが可え。」と、車夫から荷物を受取つて、座敷へ運んで居るお絹も言つた。

7

要吉は立上るのも懶い位勞れて居るので踟躕して居たが、お倉が急き立てる樣に言ふので、一日肩の張つた洋服を脱ぎ棄てゝ、下駄を突かけて土間へ廻つた。湯氣の一杯立昇つてる風呂桶へ飛び込んで、頭を桶の縁へ凭せたまゝ、ぢやぶりとも音をさせないで沈んで居た。

お倉は門側の物置から柴を一把抱へて來たが、どさりと其處へ下して置いて、「お湯の加減は宜しいかなも」と訊いた。要吉は返辭をしないで、うつとりとお倉の容子を眺めて居た。お

替えることは一貫しているので、以下では特に注記しない。

8「其儘」：岩「その儘」　「其」を「その」に替えることは岩に関しては一貫しているので、以下では特に必要性が認められないかぎり注記しない。

9「改札口で」：「橋を渡つて改札口で」

9「背後から」：「後から」

10「荷物を」：「預けた荷物を」

10「良」：岩「やゝ」　「良」「稍」などの字で「やゝ」と読ませていた場合を「やゝ」に替えることは、岩に一貫しているので、以下では特に注記しない。

10「人力車」：「俥」

10「燈火が」：「大方燈火が」

11「八間道」　岐阜駅の長住町への移転（⇩1頁3の注）に際して、新駅から美江寺まで新しく敷設し同じ幅で通された道路で、現在の中心街、神田町通りにあたる（⇩地図2、*15*頁）。

12「十字街へ出た［単「出る」］。・・・滑川に」：「十字街へ出る、其処を突切つて、遊廓を左に見て、滑川に」

＊「人通の劇しい」この四つ辻は、柳ヶ瀬近辺の繁華街を指すのだろう。この改稿では、新での「遊廓」への言及を単以降で削除したことが注目される。実際の遊廓が「八間道」から「見える」ような位置にない（⇩地図2）ことからすれば、新の描写は、「事実」への忠実度（⇩補注18）を犠牲にしてまでも「遊廓」を登場させようとしたもので、その意図としては、名所としての岐阜遊廓を出すという読

8

倉は風呂の下を覗く樣にして、長い火箸でつゝいて居たが、手に餘る黑髮を馳く束れて櫛で留めたのが、俯向く拍子にぐらりと肩へ落ちた。お倉は周章て櫛を拾つて、兩腕を上げて手早く束ねやうとした。小さい頭が太く長い頸の上に乘つて、腕から胸へかけて若い男かと思れるほど氣持よく筋肉が發育した中にも、何處か女らしい婀娜さも見えて、暗闇から浮出した樣にすらりと立つた姿は、名工の手に成つた彫像の樣にも思はれた。

一體此女は幾歳に成るのだらうと思つた。要吉が知つてからは、何時でも此通りの容貌をして、此通りの身體附をして居る。

お倉は此村に一軒ある新平民の娘であつた。親爺は村内に死人があつた時墓穴を掘るのが役で、冬に成れば夜番もする。其手隙には川魚を捕つて賣る。又百姓の閑な頃には浜花節を語つて近隣村を打つて廻つた。人からは其方の藝名で辰丸々々と呼ばれて居た。母親は又産婆を稼いで、此近所界隈の女房でお倉のお世の手にかゝらぬ者はなかつた。こんなに家内中が稼いで好い錢を儲けながら、それで居て、家は年中風車で、村でも氣の好さ相な檀那場では必ず借錢をした。お倉も十七八の時分から娼妓に賣られて、始めが沼津、次に吉原、それから靜岡の二

者サービス、あるいは要吉の性情や来歴に遊里が無関係でないことを暗示しようとしたのかもしれない。それを単で消した理由としては、要吉の背徳的で軽薄とも見える側面を弱めて深刻さ・真面目さを強めるという全体的な方針（⇩補注20、24）や、「両人の縄附」のイメージを使うなどして冒頭から押し出している暗鬱な色調を「遊廓」の浮薄さで破らない方がよいという判断との関連が考えられる。

12–13「滑川」　⇩地図2。　＊　川名は未確認だが、明治40年の岐阜市地図と『煤煙』の記述を照合するかぎり、地図2に示した川がそう呼ばれているとみるほかない。したがって、岐阜の地勢に忠実な読みをすれば、前行の「其処を突切つて」には、「左折」の意味が含まれていると考えざるをえない。

12–13「暫く監獄の裏手に成る。高い黑板塀の角で」：「暫く行くと監獄の裏手へ出る。其角で」

＊　単以降の文は「監獄の裏手」をゆく時間をより長く感じさせ、暗鬱さが持続する効果を出している。この「監獄」については、⇩補注3。

13「凪」：「木凪」

3頁1–2「要吉は最一度・・・振返つた［単「振回つた」］。」：「要吉は　の上から振回つた。女の顔を最一度能く見定めたい樣な気がした。」　「俥」の字は単以降では用いられず、そのほとんどが「車」に、まれに「人力車」（例：2頁10行）に替えられている。また縮での改稿

9

丁町・大阪の難波新地といふやうに、五六箇所も住換へて稼いで來た。勿論其間には金持の隠居に引かされたことも有つたし、所好な男と前借を踏んで逃げ出したことも有つた。それが如何云ふものか半年と續かず、其度毎に男を棄てゝ、何時でも此村へ戻つて來た。そして親兼の側で百姓の手傳ひをして居た。左樣してる間に内が金に詰つて來ると、嫌な顔もせず又稼ぎに出かけた。これだけ永く娼妓などして居れば、酒の香が身に泌みて、土臭い在郷が可厭に成りさうなものだのに、お倉は一向平氣だつた。何んな荒い野良仕事をさせられても嫌とは云はなかつた。時たま兩親と喧嘩することも有つたが、そんな時は何日でもお絹の許へ逃げて來た。そして一日も二日も家へ歸らないで遊んで居た。

日頃から此二人に合口で、お絹も自分が若い盛りに町から在郷へ嫁入りして來て、山のこけ猿の樣に手が荒れて仕舞つたといふことを、生涯の不平にもし又自慢にもして來たやうな女だから、お倉の外に一寸話の合ふ者は無かつた。お絹の實家は今潰れて仕舞つたが、元名古屋に有つたので、お絹は誰に向つても好く自分が十三の歳から御殿へ上つて、前樣のお側でお宮仕へをした時の話をした。別けて好くするのは、秋に成ると御旅中樣のお供をして、出來町の先

として「振回る」・「引回す」を「振返る」・「引返す」に替えること、岩において「能く」を「よく」に替えることもほぼ一貫している。いずれについても、以下では特に必要性が認められないかぎり注記を略す。

挿絵（3）：「一の三」（一月三日）

2「樣に［岩「やうに」］思はれた。外套の」：「樣であつた。要吉は外套の」　助動詞の語幹としての「やう」の表記は、新では「樣」と「やう」とが併用されていたが、単で「樣」にほぼ統一され、かつ岩でほとんどが「やう」に替えられた。この書き替えに関しては、以下では例外的な場合以外、注記を省略する。

3「寝る」：新・単「寐る」　縮での改稿として「寐る」を「寝る」に替えることは一貫しているので、以下では特に注記しない。

のお林へ茸狩に行つた話であつた。髪を見輪に結つて、羽二重の羽織袴を着て、擦絲の帶を堅結びにして、赤い鼻緒の草履を穿いて、御籠側に引添つて、しやなら〳〵と濟まして行く。自分の家の傍を通る時に、近所のお友達や母親達が見物して居て、あれ彼處にお絹さまが行くと小聲で囁くのが聞えると、胸が躍つて嬉しかつたと云ふのである。要吉も此話は小さい時から側で何度となく聞かされた。それが如何云ふものか、子供心にも伴話のやうに思はれて成らなかつた。お絹が其時の樣子を衣裳の色合や模樣まで、目に見る樣に委しく話せば話すほど、餘計に嘘の樣に思はれた。お絹は又お倉に對しても負けぬ氣に成つて、昔・新地の枕水といふ妓樓に居た菖蒲太夫の全盛を說いて聞かせた。大阪の札指の零落れた家の娘で、其頃年紀はまだ十七にも成らぬ位、それは〳〵雛樣見るやうな可愛らしい妓であつたが、可哀相にさる大臺に身受けされると、間もなく病み附いて死んださうな。お絹の談話工合から見れば、是程大納言も菖蒲太夫もさのみ遜色が無いやうに見えた。

此樣にしてお絹とお倉とは殆ど毎日の樣に話し合つて暮した。お倉は何日も意氣地が有るのか無いのか、莫迦か怜悧か分らない女であつた。第一あれだけ永くあんな樣樂を勤めて來ながら

4「偶」：岩「偶〻」

4–6「放火か、亭主でも殺したのか・・・思はれて」⇩補注4。

5「何れにしても」：「いづれにしても」

5–6「又下らぬ妄想を・・・見たが、」

＊　要吉の性格を積極的に表示する部分。空想に耽りがちで、かつそれを「下らぬ」と自分で「打ち消す」というパターンをもつ。このような性格の造型にあって自分をそのまま出そうとしたのでないことは、作者の繰り返し述べるところである。すなわち、女主人公の朋子を「悪魔主義（デヤモニズム）の権化のやうな女性にしたいと思つてゐた」草平は、それには「対する要吉もさういふ性格の解るやうな、理智の勝つた、近代的な知識人」、つまり「所謂ハムレット型の人物」にする必要があると考えたのだが、実際の自分はそれからは遠く、「寧ろドン・キホーテ型の人物だと云つた方が一層適切でもあつたらう。」（『漱石』下、79頁）。⇩補注20、24。

6「今更・・・思はれて、」：「打ち消す下から婦女（をんな）といふものと罪悪との関係が犇（ひし）々と胸に迫つて、」

7「一緒に、要吉の胸を」：新「一所に要吉のこゝろを」：単「一所に、要吉の胸を」

8「要吉は自分の」：「要吉は東京に於ける自分の」

8「去年の冬、・・・隅江を」：「去年の冬妻の隅江を」

＊「隅江」は草平最初の妻、森田つねがモデル。岐阜県坂下女子高校文芸部が戸籍にもとづいて行った調査（同校

11

ら、左様いふ女に有勝ちな、色澤の悪い、病み窶げた容子に少しもなく、子供こそ産まないが身體は何日もみづ〳〵と脂切つて、皮一重下には若い血汐が漲つて居る樣に見えた。これからして譯の分らない女で有つた。

宛刻から要吉は茫然して湯の中に浸つて居ると、お倉が不意に風呂の縁へ手をかけて、

「背中を流さうかなも」と訊いた。

要吉は夢から覺めたやうに飛上つたが、「いや、最う出る、出る」と、急に手拭をちやぶちやぶ遣り出した。

「まア靜として被坐しやいよ」と、お倉は押へ附けるやうにして背中を流して呉れた。

此時要吉はお倉の二の腕に入墨をして、灸で消した痕があるのを見附けた。強い腕の力で背中を擦られて、好い心持に成つて、「お前喪疏やらに成つたんだね」と訊いた。

「三十四」と言下に答へる。

一寸まごついたが、「まだ一人身か」と訊れ直した。

「えゝ」と笑つて居る。

文芸部雑誌『友樹』43、森田草平特集号）によれば、森田源八の長女で戸籍名「里う」で、草平と同年の明治14年4月3日生まれ。隅江は要吉の従妹とされているが、つねに草平との血縁はない。大正3年3月、岐阜鷺山の隣家の安藤兵一（のち芳流）が画家を志して上京した際、小宮豊隆に宛てて携行させた書状に安藤をつねの又従兄妹と紹介している。草平自身が隅江との肉親関係があるならばそれにも言及しそうなものである。この設定には、E・A・ポーのいとこ結婚や、社会からの逸脱の一形態としての近親相姦が意識されている可能性がある（⇩補注5）。

草平が明治32年3月に中学を東京の日本中学校を卒業し、7月に金沢の第四高等学校に入学するまでの帰省中に恋愛関係に入り、金沢へ草平を追って同棲。11月にはこれが発覚して草平は諭旨退学となる。翌年7月の第一高等学校（東京）入学以降も関係は続き、卒業し東大英文科に入学した36年の8月に長男亮一が出生。39年夏の草平帰省（⇩1頁6の注）直前には岐阜で第二子、夏子が生まれたが、つねとともに上京後、翌年2月20日ごろ夭折（⇩補注46、根岸『森田』、12、54頁）。『煤煙』の隅江は第一子、夏子（⇩46頁1の注、補注46）を出産したばかりという設定で草平における事実とは食い違う。亮一に相当する子への言及は『煤煙』にない。

9「女の・・・却て」：「隅江に取っては」

10「無からう」：岩「なからう」　岩での改稿として、「無い」を「ない」に替えることは一貫しているので、以

要吉は風呂から上つて、お絹が据ゑた食膳に向つた。お絹は盃を持つて側に坐つて、お給仕をしながら、種々三年の間に變つた村の噂をした。併しあれ程差迫つた手紙を出して、要吉を呼び寄せた肝心の用事に就ては何事も言はなかつた。成るべくそれに觸らない樣にして居る容子も見えた。そして一番多く隅江が産をした當時の騒動やら、それから後の消息を語つた。

「彼娘が慣れんもんぢやでな。それに月足らずではあるし、生れた當座はこれで育つか知らと思はれる程小さな兒ぢやつた。なア お倉さ。」

「本當に自宅の阿母でさへ、あんな兒が育つと云ふは珍らしいと云つてたんぢや。」

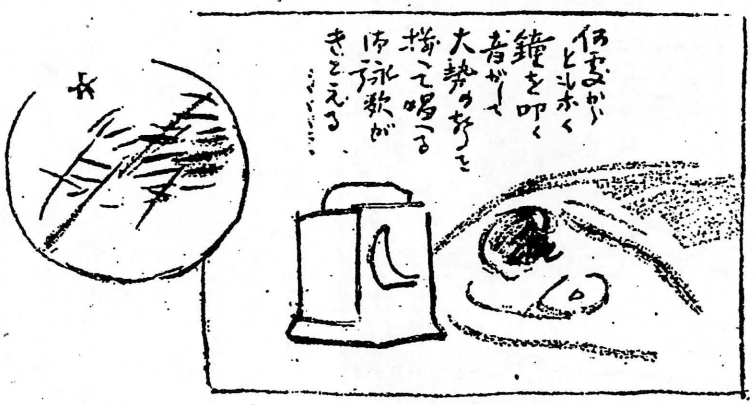
お倉は風呂から上つて、湯氣の立つ身體を拭き〳〵大きな聲で返辭をした。

「隅江さも此頃は最う大抵快く成つた樣ぢやが、一時はどつと床についてな。それに彼娘の阿母さんと云ふが、左樣云つては惡いが、私が見て居ても眞實の娘とは思はれん位構つて遣らん人でな。」

お絹は要吉の顔色を眺めては、ぽつり〳〵と話した。そして何かと云ふとお倉の方を向いて、同意を求める樣に「左樣だつたね」と訊れた。久し振に會つた爲でもあるが、我子にも氣を遣

下では特に必要性が認められないかぎり注記しない。

挿絵（4）：「一の四」（一月四日）



10「腹の児」　＊　後段で赤ん坊として登場する夏子をいう。⇩3頁8の注、補注45。

11「要吉もほつと息を吐いた」：「要吉自らもほつと息を吐いで、僅かに一日の安きを偸んだ。」

いて居るやうな氣色を見ると、要吉は何となく可愛しくて成らなかつた。

「未だ戸外へ出歩かれないやうな體裁ですか。」

「そ、そんな事も有るまいよ。明日にでも使者を遣れば、屹度飛んで來るだらう。」

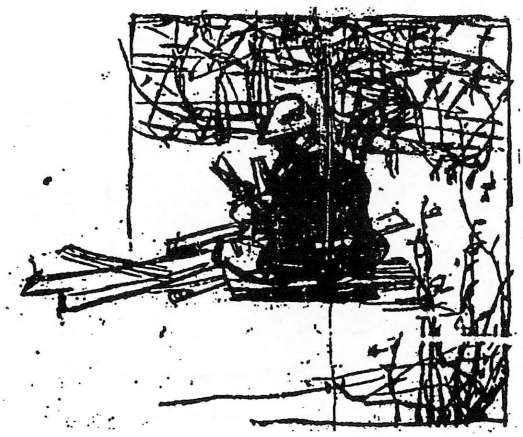
「なに、それにも及びません。」

それから暫く經つてから、要吉は好い位に談話を切上げて、子供の時に起臥した寢間へ這入つて、記憶のある夜具を引被つて枕に着いた。停車場へ行つたといふ與三松が歸つて來て、お倉にがみ〳〵言はれて居るのを夢現の境にして、其後はぐつすりと寢込んだが、間もなく何者にか搖いて眼を覺した。枕頭には古い行燈の油に滲んだ紙がぼんやり照されてゐる。何處からともなく鉦を叩く音がして、大勢の聲を揃へて唱へる御詠歌が聞える。それが竹藪の向ふへ廻つて遠く微かに聞えるかと思ふと、又ぱつと大きく近く聞える。秋の夜長に成ると、何處の辻堂とか藥師堂とかの建立と稱へて、田舍では好く老人や若い者や、男も女も一緒に連立つて勸進に出掛けるのだ。要吉はそれが耳について、久しく眠られなかつた。

11「実家で」：新「実家で」：単「実家で」
12「成るのに、」：「成るが、」
12「してる相だ。」：岩「してるさうだ。」
13「母親のお絹」：「要吉の母親のお絹」
＊「お絹」のモデルは草平の母、とく。鷺山の隣村、福光村（⇩地図1）の出身で（⇩前掲『友樹』〈3頁8の注〉）、少女期に尾張徳川家に勤仕した。⇩9頁12-13の注。

4頁1「別に」：0
3「楯突いて執拗く」：「楯突いて、執拗に」
3「云はせる者が有る［岩「ある」］」：「云はせる人が在る」

挿絵（5）：「二の一」（一月五日）



二

明くる朝要吉が寝床を出た時は、障子に日影がかん〳〵と當つてゐた。曇つた空は昨夜の間に名殘なく晴れた。楊子を啣へながら縁側へ出て見ると、藏の前の明地に竹屋の佐兵衛が來て居る。庇の樋を取替へるために傭はれて來たものらしい。裏の竹藪から太い眞竹を伐り出して鋸で竪に引き割る。引割つてから節を丹念に剔つて取るのだ。佐兵衛は要吉の顔を見ると、冠つてゐたお釜の樣な帽子を取つてお叩頭をした。

「樋を代へるんだね。毎歲今頃取替へるものか知ら。」

「何有に、左樣と云ふ譯も御座いません。何時でも田畠の閑な時見て遣つときますぢや。」

青竹を割つて樋を造ると云ふことが、要吉のこゝろに適つた。何となく田舍へ戻つたといふ感じが深い。それに興を催して、まだ楊子を啣へたまゝ其處へ蹲がんで、凝乎と佐兵衛の鋸を引く手許を見詰めて居た。

藏の前の明地といふのは、元瓦屋根の柱が煤びて黑ゝ母屋が建つて居たので、大地震の折に

4「引いては」：「曳いては」
5「積り」：「積」
5「紛糾した」：「紛糾した」
6「来た。」：「来たのだ。」
8–9「言ひ得やう［岩「よう」］」：新・単「云ひ得やう」

新での「云ふ」は単以降のいずれかの段階で「言ふ」に替えられる傾向にあり、ここでの場合のように縮での変更が最も多い。この書き替えについて、以下では特に必要性が認められないかぎり注記しない。

9「其結果」：岩「その結果」　岩での改稿として、「其」を「その」に替えることはほぼ一貫しているので、以下では特に必要性が認められないかぎり注記しない。

9「とも思つた。」：明・岩「と思つた。」

9　**新「一の一」（一月一日）**了。　この日、小宮豊隆から草平に「成功だ！」との祝辞の葉書が届いた（『漱石』下、75頁）。

10　**新「一の二」（一月二日）**第一行に相当。

10「堤へ上つて」　＊　四ツ屋町（現存の町名）付近から長良川堤防に上ったと見られる。この経路だと、「八間路」の延長線上に曲折する主要道路を経て長良橋に至るよりも、20分くらい余計に要吉の郷里である対岸の鷺山の方向を遠望することができる。⇩地図1、*14*頁。

10「堤」：岩「土手」

10「上つて」：新「上つて」：単「上つて」

15

七分通り倒れかけたのを、恰度祖母や父の亡くなつた後で、家内は小人数で逼塞して居た時分たから、序に取崩して仕舞つて、其頃の離家に庇を繼がせて住まふやうにした。それが今の小さい家だ。母屋の跡は其後十餘年明き地の儘で捨てゝある。べん〳〵草も生えた。裏の藪から根を張つた芽生えの笹も茂つた。子供は其中を狂ひ廻つて遊んで育つた。夏と秋との收穫には隣家から麥の穗や粟を乾させて貰ひに來た。年の暮には小作人が集まつて、樹で米を量つて、新藁の俵へ入れて藏へ納めた。或年の秋祭には其處へ小屋掛けして、村芝居を興行したことさへあつた。屋敷跡で芝居を打つ樣ぢや、最う其家の運勢も末だと云つて、村の年寄どもが騷つたさうな。それが騷を爲した譯でもあるまいが、お絹の手一つに委れて居いた身代は見る〳〵傾いた。要吉は十四の歳から東京へ勉强に出されたが、それが大學を卒業する頃には、最う小作人も年貢米を量りに寄つて來なく成つた。

勿論其間には不作もあつた。三年續いて耕地の上を洪水が溢れて、米一粒野菜一把取れないこともあつた。左樣成つては年貢米を宛にすることが出來ない上に、片方では要吉の學費が段段かさむので、其頃から少しづゝ田地を減し始めた。お絹は子煩惱であるから、我子が成業す

10「長良橋」 ⇩地図1。

11「見える」：「見る」　変体がな「ゑ」の「え」への変換は単以降一貫しているので、以下では注記しない。

12「要吉の生れた村」　草平の生まれた岐阜県方県郡鷺山村に一致。明30年稲葉郡となり、昭和10年岐阜市に編入された（⇩地図1）。現在の岐阜市鷺山。

13「仄白う」：「仄白く」

13「所為か、」：岩「せゐか、」

5頁1「人力車」：「人力」

1「轟く。」：「轟く、」

2「如何して」：岩「何うして」　「如何」を「何う」に替えることは、岩に関しては一貫しているので、以下では特に必要性が認められないかぎり注記しない。

2「知らない。」：「知らず、」

2「杵の音が」：「昔ながらに廻る車と杵の音とが」

3「上げた。」：「上げた、」

4「直に」：岩「直きに」

4「生れた家だ。」：「要吉の生れた家だ。［改行なし］」

草平の生家の位置に符合。現・森田草平記念館の東隣、北川満平氏宅の位置。 ⇩地図1。

5「降りて、」：「降りて。」

5「開かない。」：「開かないので、」

5「少時」：「暫し」

6「降りて、潜りを」：新「降りて。潜りを」：単「降り

るために、身代の無く成るなぞは何とも思つて居なかつた。只それが向ふ五箇年の學資がある つもりで、勘算を立てゝ金子を調達して、お絹に預けて置くと、一年餘りの間に何處へか消えて仕舞ふ。又三箇年位はと思つて拵へると、一年足らずの間に無く成る。お絹は自分でも氣を採んで非常に心配して居るが、其中から無くすることは矢張無くして居た。こんな工合で元々多くも無い身代だから、今では雜木許りで薪や柴しか刈れない山林が數丁歩と、租税が高いのと年貢が滑るのとで、誰も買手の無い小作人の宅地が七箇所許り殘つてゐるだけに成つた。それだから要吉は學生時代から少し宛は筆で稼いで、學資を補ふ樣にして居たが、學校を出た其日から自分の腕一つで世に立つ外はなかつたのである。

「要さや、〳〵。顏が洗へたら直ぐ御飯を喫べなさらんか」と、家の中からお絹の呼ぶ聲がした。

二三度呼ばれてから漸と聞附けて、要吉は知らゐ間にお絹が汲んで置いた金盥の湯で、べちや〳〵と顏を洗つたまゝ家の中へ這入つて行つた。茶の間ではお絹が膳立をして、長火鉢の側に子然として待つて居た。要吉は座に着いたが、茶碗が二つ伏せてあるのを見て、

て、潜を」

6「行暮れて、一夜」：「行暮て一夜」

7「そしてる間に」：岩「そしてるうちに」　岩での改稿として、「間」を「うち」に替えることは一貫しているので、以下では特に注記しない。

7「弓張提灯」　竹を弓のように曲げ、提灯をその上下にかけて開くように作ったもの。

8「顏を」：「蒼い顏を」

9–10「お這入りなんしよ。」：明・岩「お這入りやすな。」

13「追ひ縋る」：新・単「追縋る」

13「樣に随いて来て、」：「やうにして」

13「あれは」：「與三松は」

6頁1「したぞい。」：岩「したぞい？」

3「人込でうろ〳〵して」：「人込みでけろ〳〵して」

3「見外して仕舞った」：「見外つして仕舞ッた」

5「左樣」：岩「さう」　岩に一貫する書き替えなので、以下では特に必要性が認められないかぎり注記しない。

6「行儀よく・・・上で」：「円石を行儀よく並べた上を」

7「爆る」：明「爆る」：岩「はじける」

8「切り、」：新・単「許り、」

9「聞き附けて」：「聞附けると、」

10「瞳子」：明・岩「瞳」

11「要樣」：「要樣」

12「お倉」　＊　鷺山村内の被差別の家系に生まれた

「阿母さんも喫らないで、待つて居て呉れたのですか。それは何うも。」
「久し振で一緒に馳ばれやうと思つてな」と、お絹はいそ〳〵と箸を上げたが、「何も口に適ふやうな物が無うてお氣の毒ちやな。」
「なに澤山です。」
「それでもな、お前さんが所好ちやつたと云つて、佐兵衛が山の芋を持つて來て呉れたで、早速汁にして見た。さ、加減見てお呉れな。」
お絹は努めて愛相好くしたが、何處かきよと〳〵して我子を憚る容子が見えた。斯うして親子差向ひで顏を見合せて居ながら、二人の間には遠い距離が出來たやうで、何うも打解げた心持に成れない。要吉は來てお絹に或關係の男があることも、それが何日からとも知れぬ昔から續いた間柄で、今如何することも出來ないと云ふことも知つて居た。其男といふのは矢張名古屋生れの齒工で、要吉の父が生前から知合であつたさうなが、或事情から一時閾を跨がせなかつた。それが父の歿後又繁々出入するやうに成つて、來る度に毎も手土産など買つて來ては、要吉を自分の子の樣に可愛がつた。それがたゞお絹に取入る爲めばかりでなく心から可愛く思ふ

17

実在の女性をモデルとすると思われる。同一視しうる女性が草平後年の自伝的長編『十字街』（明45）、『輪廻』（大12–13。⇩8頁8の注）には、物語上より重要な人物として登場する。⇩7頁13–8頁5の注、補注26。

12「どさりと」：「どかりと」
13「・・・とさ」と、」：「・・・とさ」、と」

7頁1「何の事だ」：岩「何のこつた？」
1「それに」：「それは」
2「鈍間」：新・単「愚鈍」
3「其間」：新・単「其内」：岩「そのうち」
6「やして」：「やあして」
7「左樣ぢや、〳〵、左樣」：新・単「左樣ぢや、左樣ぢや、然う」：明「左樣ぢや〳〵、左樣」：岩「さうぢや〳〵、さう」
7「車夫」：「車夫」
9「居るので跏して」：新「居るので、跏して」：岩「ゐるので、ぐづ〳〵して」
10「廻つた。」：「廻つて、」
11「飛び込んで、」：「飛び込んだ。」
11 新「一の二」（一月二日）了。当日、漱石から馬場孤蝶へ「煤煙出来栄ヨキ樣にて重畳に候」との葉書（『漱石』下、75頁）。
12 新「一の三」（一月三日）第一行に相当。

らしかつた。尤も其時分は要吉もほんの子供で。何の事やら譯は分らず、お絹が伯父様と呼べと云ふから、其通りに伯父様、伯父様と云つて慕いて居た。其伯父様はいろ〳〵家の中の世話を燒いたが、岐阜が大火事で丸燒けに成つた頃、好い仲間があるから芝居小屋を建てやうと云ふので、お絹を說伏せて田地を大半賣入させたが、板葺の小屋が出來上つて、田舍廻りの旅役者で一興行濟んだ頃には、もう人手に渡ると云ふ樣な事もあつた。其外これに類した事は幾許もあつたが、要吉は別に氣に留めなかつた。それが段々物の譯が分つて來ると、最う伯父様とは呼ばなく成つた。其男の方でも流石に遠慮して稍遠ざかつた。其後要吉が東京へ出た後では、又自分の家の樣に入り浸つて居ると云ふことを漸々聞いて居た。それ許りでなく、其頃から氣が荒く成つて、家中を引っ掻きまはして、有金を掴み出して使ひ捨てる。それでも足らんで、お絹を口汚く罵つて、打つたりはたいたりすることも有つたさうなが、お絹の方に未練があつて、如何しても別れられないで居た。そんな目に會ひながら、直ぐ其後から忘れて仕舞つて、二言目には伯父様が〳〵と要吉の方へも決して惡うは言つて寄越さなかつた。其男が酒にでも醉拂つて、「俺はこんな片田舍で朽果るやうな平凡畜工ではない、立派な腕を持ちながら、手

12–13「お倉は・・・訊いた。」：「「お湯の加減は宜しいかなも」と門側の物置から柴を一把抱へて来たお倉が訊いた。」

12「門側」：岩「門脇」

13–8頁5「要吉は返事を・・・思はれた。」

＊　お倉のイメージについては、『煤煙』着手に当たって参考のために読んだ小説として、作者は、ダンヌンツィオ『死の勝利』、ドストエフスキー『罪と罰』のほか、漱石から借りたというズーダーマン『猫橋』を挙げ、その女主人公レギーネとの類似を認めている（『漱石』下、52–53頁）。お倉の描写においてレギーネの描写が参考にされたことは、後年邦訳された同作の次のような箇所に見て取られる。「彼女が彼の呼びかけた声に、はつと驚いて腰を伸ばしたとき、彼女は半裸体で彼の前に立つてゐた。二つの黒い大きな眼が、彼の上に燃えるやうに注がれた。」「「彼女の」傷跡は肩の上や、乳のあたりの、褐色がゝつた温かな銅色の肌色を破つて、赤い血管を浮出させてゐた。」（四章）「彼が台所に入つて行くと、女は竈の傍に立つて、燃え付いたばかしの焚付けの上に身を屈めて、頰をふくらまして吹いてゐた。」（八章。生田春月訳〈新潮社、一九三〇〉に拠る）

お倉の登場はⅠに限られるが、Ⅱ以降で中心的な女性登場人物となる朋子と呼応し合う点もある。⇩補注26。

蔓が無いため一生頭の上らぬのが残念だ」と、空の烟壺を壁へ投げ附けて呶り立つ時なぞは、お絹は殴られて紅くなつた肘を撫でながら、涙を流して幾度も點頭いた。何でも男の言ふことを正直に信じて居た。此男の手にかけては、お絹は宛然新紛細工の様に如何にでも成るのであつた。要吉も是等の事情を大抵は知つて居た。それで心の中では憤慨もし苦々しくも思ひながら、自分から進んで如何することも出來なかつた。一體、要吉は何事に依らず成る様に成らせて置くことしか出來ない男で、それには又始終東京で暮して、遠く離れて居たから、都合の好いことも有つた。けれども、今目の當りお絹の落着かない容子を見て、心では既う自分を疎外して居るのだなと感附くと、我を忘れて母親が憎らしく成つた。で、箸を下に置いて、凝乎とお絹の顔を見入つた。

昨宵釣洋燈の火影で見た時は、さのみとも思はなかつたが、今朝見ると、お絹の老け様は一通りでなかつた。昔から名代の洒落者で、今も身躾みがよく、何日頃の流行かは知らぬが、黒天鵞絨の襟を掛けて、青筋の張つた頸筋の色の際立つて白いのや、眼の縁に小皺が寄つて、紫色に見えるところなぞは、昔ながらの様でもあるが、頬がげつそりと瘠けて額が拔け上つた爲

8頁1「火箸」：「火針」
2「拾って、」：「拾って獅子が鬣を振ふやうに一ゆすり揺って、」
挿絵（6）：「二の二」（一月六日）

4「筋肉・・・にも、」：「筋骨が逞しい中に、」
4「婀娜さも見えて、」：「婀娜やかさも在って、」
5「名工の・・・思はれた。」：新「古代名匠の手に成った女神の銅像を見るやうであった。」：単「彫刻の置物の様にも思はれた。」：明・岩「名工の手に成った銅像の様

めに、何處となく顔が野卑に見えて、これが自分を生んだ親かと情ない位であつた。昔、要吉が七八つの時には、他所へ連れて行つても、阿母さんと呼ばれるのを嫌がつて姉さん〳〵と呼ばせたものだ。今こんなに成つて居ながら、まだ年齢を隠す心持が失せないのか、好く氣を附けて見ると、いやに黒光りと思つた髪は染めたものであるらしい。これ程迄にして男に飽かれまいと勉めるのか。いかにも人間の弱點を目前に見せ附けられた樣で、要吉は漫ろに淺間しく成つた。淺間しいと云ふよりは、母親が可憫らしく成つた。これで見れば、お絹はお絹で始終風花が絶えぬのだ。左樣思つて見ると可哀相に容子が落膽して居る。要吉は胸が詰るやうな氣がした。

「如何かお爲たのか、何もお喰べんやうぢやが。」お絹は氣遣はし相に要吉の顔を見上げて言つた。

「れえ、阿母さん」と、要吉は一生懸命に涙を飲み込んで、「私は今度成らうことなら阿母さんと一緒に東京へ歸らうと思つて來たんだが、如何だな、阿母さんも一つ奮發して、こんな家なぞ畳んで出掛けては——私も左樣成りや安心します。」

[岩「やう」]にも思はれた。」

6「成る[岩「なる」]のだ」：「成るんだ」

8「一軒ある」：新・単「一軒在る」

8「新平民の娘」：明「×××の娘」

＊　明（一九二七）および『現代日本文学全集』（改造社、一九三〇）版で伏せ字。岩（四〇）で元に復している。「新平民」も後出の「穢多村」（58頁4）と同じく俗世間で語り伝えた差別用語であって使用すべきでないという意識が、全国水平社（一九二二年創立）の活動等により一般に高まってきたことを反映する現象か。ただ、草平当人はこの種の差別語の問題に一家言をもっていた。「文芸の創作に関して水平社同人諸君に御相談」（『文芸春秋』、一九二五・12）は、雑誌連載を終えた長編小説『輪廻』（一九二三―四〈大12―13〉。『煤煙』のお倉とモデルを同一とする人物やその家族と主人公らとの交流が濃密に描かれている）の単行本化に際して書かれたもので、そこで草平はこう書いている。「私の作「輪廻」は遺伝と系統のために、世間の迫害の下に生きてゐるものの苦痛を訴へた作であるが、一面に於ては「番太郎」を始めとして所謂第四階級のために気を挙げた作である。然るに雑誌の編集者はその中から「△△」や「××」と云ふ文字を抹殺して、悉くそれを△△や×××の符号に代へてしまつた」。このことの「支障」について訴える草平は、「況や作者は水平社の属せられる部落に好意を有つと云ふよりも、寧ろ部落の一員になり切つた気持ちで書いてゐる場合に於て、特に不便を感ずるも

お絹は吃驚したやうで有つたが、「私もな、左樣思はんことも無いが」と、顎を襟へ落して考へ込んで仕舞つた。

二人は暫らく無言で相對した。

瓦有つて、要吉の方から口を開いた。

「山林を抵當にして、何れだけとか金子を借りる話だつたが、實際そんなに貸す人が有るのですか。」

お絹は急に元氣づいた。聲に張も出て、「本當に有るのぢやとさ。それがれ、お前は知らぬぢやろが七五郎と云つてな、若い時から村を飛び出して永いこと行方の知れなんだ人ぢやが、去年不意に臺灣から大金を儲けて戻つて來て、あの蟹に有つた自宅の宅地な、彼處を買つて立派な普請はするし、それはえらい勢ひぢや。其人が自宅の判さへ捺きや、幾許でも貸さうと云ふんぢやげな。」

要吉は俯向いたまゝ聞いて居たが、「ま、貸す人が有るにしても無いにしても、阿母さんも彼人の爲に金子を工面するのは、好い加減に止めたら如何です。餘分久しいものぢやないか。

21

のである」と述べて呼びかける。「水平社同人諸君よ、望むらくは、私どもは・・・「輪廻」の主人公と共に「父の子であることを恥ぢない」やうにいたしたい。そして、△△とか×××とか云ふ文字がいくら印刷物の上に横行しようとも、それが侮辱の意味を寓しない限り、平気でそれを看過するだけの雅量を有つやうにしたい。」

桑原律によれば、この点について「回答した人たちのほとんどは森田草平への賛意を表し、出版の時点でも、その後においても、水平社側からの『輪廻』に対する抗議や妨害がなかったことは確かである」（『森田草平と部落問題―日本近代文学の一断面―』（大衆書房、一九九八〈⇩58頁4の注、補注26〉112頁）。

8–9「役で、」：「役目で、」

12「檀那場では」：「家では」　「檀那場」は旦那場とも書き、得意先、得意場の意。

9頁2「所好な」：「好きな」　この書き替えは単においてほぼ一貫しているので、以下では特に注記しない。

2–3「如何云ふものか」：新「如何しても」：岩「何う云ふものか」　岩での改稿として、「如何」の「何う」への書き替えは一貫しているので、以下では特に必要性の認められない限り注記しない。

3「棄てゝ、何時でも」：新「棄て何日でも」：単「棄てゝ、何日でも」

4「左樣してる・・・来ると、」：「然うしてる間に家内

彼人の爲には自宅も何度となく餘計な損をして來たのですからね。」

「それだからさ」と、お絹は相手の言葉を抑へる樣に、「今度會山樣の御道具がお拂下げに成るについて、それを引請けて、名古屋へ來て居る西洋人に捌める事が出來さへすりや、大變なお金に成ると云ふのぢや。左樣なれば、從來損した位は一度に埋合せが着くと云つてぢやが、何分側から競爭する者もあるので、早い處手附を打たにや成らぬが、それが未だ手に入らぬので、伯父樣も毎日氣を揉んでおいでぢや。」

「だつて、左樣いふ物は又其道の商法人があつて、素人に儲けさせる迄放つて置く筈がない。それに奮大名の道具が今頃拂下げに成ると云ふのも許しいし、左樣いふ事は得て詐欺師の種に使はれるものですぜ。」

「いゝえ、そんな事はお前、伯父樣も左樣云ふ方には眼が利いてゐで間違は無いわな。此間私も一寸見せて貰つたが、六枚折の屏風一雙で三千圓もすると云ふんでな、それは〳〵見事な物ぢやつた。」

「三千圓の屏風は如何でも可いが、私はどうも其んな事に係り合ふ氣には成れません。」

で金に詰まることがあれば、」　「さう」の表記は、新では「然う」と「左樣」とが併用されていたが、単で「左樣」にほぼ統一され、かつ岩でほとんどが「さう」に替えられた。この書き替えに関しては、以下では特に必要性の認められないかぎり注記しない。

7「許へ」：「許に」

8「居た。」：新「行く。」：単「居る。」

9–10「山のこけ猿」：新「こけ猿」：単・岩「山のこけ猿」

11「無かつた。」：「無かつたのだ。」

11「潰れて」：「つぶれて」

12「有つたので、」：新「在つた。」：単「在つたので、」

12「前樣」：岩「前の大納言樣」

＊　徳川慶勝（一八二四–八二）を指すと思われる。一八四九年から五八年まで尾張徳川藩主。安政の大獄で隠居後、弟の茂徳から子の義宜に藩主がうけつがれる間も実権を握り、明治3年には名古屋藩知事となった。

12–13「お宮仕へ」：新・単「宮仕へ」

＊　草平の母の宮仕えの様子は、のちの短篇「御殿女中」（『ホトトギス』臨時増刊五人集、明44・4）に窺うことができる。

13「別けて」：「殊に」

13「好く」：新・単「能く」　縮での改稿として、「能く」を「好く」に替えることはほぼ一貫しているので、以下では特に注記しない。

斯うきつぱり言ひ切られると、お絹は又しょげて仕舞つた。

「伯父様も一生懸命に成つてお坐ちやがなア」と未練らしく言つたが、「それにな、實は彼人も仕事の方が面白うなうてな。畫きにかゝろと何うも手が震へて不可んさうぢや。近頃は身體も減切り弱つてな、私も困つて居るわな。」

「矢張酒毒ですか。」

「左様ぢやらうな」と、お絹は溜息を吐いた。

伯父といふのは、名古屋から出る七寶燒の圖案を流世にして居たのであるが、舊時代の職人で、新しい意匠の持合もなく、左様でなくとも餘り歡迎されぬ所へ手が利かなく成つては、今後如何することだらう。あれでも繪を畫く人の端くれかと思ふと、要吉は何だか才なくして藝術に依頼する者の末路を見るやうな心持がして、如何やら我身につまされた。それと共に日頃成るべく避けて考へまいとしてる或事を想ひ出さずには居られなかつた。それは自分が或は此身を持崩した老畫工の血を別けた子かも知れないといふ疑惑である。こんな事はお絹も流石に言はないし、要吉も決して口へは出さなかつた。併し兩人顔を見合せると、暗默の間にそれを

23

13「出来町」　名古屋市東区に現存する町名。

10頁2「引添つて、しやなら・・・行く。」：「引添つて済まして行くと、」

3–4「行くと小声で囁く」：「行く〳〵と囁く」

4–7「要吉も・・・思はれた。」：「お絹は其時の様子を着物の色や模様まで、手に取るやうに詳しく談す。要吉も此話は幼さい時から側で何度となく聞かされた。それが如何云ふものか、子供心にも佯話のやうに思はれて成らなかつた。」

5「佯話」：岩「佯り話」

6「話せば話す」：単「談せば談す」　縮での改稿として、「談す」の「話す」への書き替えはほぼ一貫しているので、以下では特に注記しない。

10「談話」：新「談し」：岩「話し」

10–11「尾張大納言も・・・見えた。」：「尾張大納言にも菖蒲太夫にも同じ程度の敬意を払つてるやうであつた。」

12　新「一の四」（一月四日）第一行に相当。

12「此様」：明「此様［ルビなし］」：岩「この様」

12「意気地」：新・単「意久地」

11頁1「有勝ちな、」：「能く見るやうな、」

2「様に見えた。」：「やうであつた。」

5「背中を・・・なも」：「お背中を流しませうか」

許して居る樣であつた。

要吉は其事を底迄突留めて確めて見るだけの勇氣が無かつた。只成るたけそれを想ひ出さないやうに、考へない樣にする外に術はなかつた。それを思ひ出せば、要吉の眼には必ず蒼い顏をして蒲團の上に横たはつた亡父の俤が泛んだ。要吉が五歲の春亡く成つたと云ふから、實際父の面影と云つては何一つ記憶えて居ない。人に聞けば八年も病褥に横はつて居たと云ふ。其永の歲月、お絹は些とも可厭な顏を見せないで、他人からも感心されるほど忠實に病人を介抱したさうだ。それだけが切めてもの慰藉であつた。

要吉は不意に、「阿父樣の二十三回忌は來年でしたかね」と訊いた。

お絹は妙な顏をして我子を見返したが、

「左樣、來年ぢやつたらうな。」

「阿母さん、阿父樣も氣の毒な人ぢやつた。些たア阿父樣のことも思つて上げて下さい。」

「私が」とお絹は眼を圓くして、「私が阿父樣の事を忘れて居るつて、お前までが其んな事を思つてお呉れか」と、俯向いてしく〳〵泣き出した。

＊　終助詞「なも」は濃尾地方方言。単以降は、お倉の要吉に対する言葉に丁寧度を減らす（8行目も同様）とともに「なも」を加えることで方言の使用を明確にした。改稿におけるこの方向性は、お絹、隅江ら郷里の人全般について指摘しうる。⇩45頁2行の注。

6「飛上がつたが、・・・と、」：新「飛上がつた。／「いや、もう出る、出る」と云つて、」：単「飛上がつたが、「いや、もう出る出る」と云つて、」

8「まア静と［岩「じつと」］して被坐しやいよ」と、」：新「まア静として被坐しやいましよ」とたしなめる樣に云つて、」：単「「まあ静として被坐しやいましよ」と、」

8「呉れた。」：「くれた。」

9「見附けた。」：「見た。」

12「一寸まごついたが、」：「少し狼狽したが、」

12頁2「種々」：「いろ〳〵」

5「彼娘」：岩「あの娘」　「彼」を「あの」に替えることは岩に関しては一貫しているので、以下では特に必要性が認められないかぎり注記しない。

5「もんぢやでな。」：「もんぢやしなア。」

7「本当に」：新・単「真実に」　縮での改稿として、「真実」、「真実」または「真実」を「本当」に書き替えることはほぼ一貫しているので、以下では特に必要性が認められないかぎり注記しない。

が、又顔を上げて早口に言ひ出した。

「私はこれでも阿父様の忌日命日を忘れて暮したことはない。けれど、あの伯父様はな、お前は知るまいが、阿父様の生きてぢやつた頃から隨分自宅の利益に成つた人ぢや。そりや芝居小屋なんかで損したことも有るにや有つた。それを言ひ出されると、私はお前の前へ顔は上げられんが——」

「阿母さん」と、要吉は鋭く言ひ切つた、「私はそんな事言ひ出しちや居ない。」

「そ、それが」とお絹は狼狽して、「そんな事お前は言出しは爲なさらぬ。けれどもが、それを思ふと私の胸は實に切ない。それと云ふが、伯父様だつて皆お前の利益を思つて、自宅の身代を殖したいばつかりで計畫むだ事ぢやけれど、何うも思ふ様に成らなんだのぢや。お前だつて伯父様のことを餘り悪う思つては濟むまい、濟むまい。」段々泣聲に成つて、しどろもどろな事を言ふ。

要吉は默つて見て居たが、やがて、「阿母さん、ま、泣くのは止めて下さい、泣かなくとも譯は分つてる。私は斯うして東京から態々來た位だから、阿母さんもそれ程に思つて居るんだ

7「自宅の阿母」：新「内の阿母ア」：単「内の阿母」
7「云ってたんぢや。」：「云てたんや」
8「返辞をした。」：「返辞した。」
9「快く」：「快よく」　新のルビには著者の意向に反すると思われるものが少なくないが、その一例である。これらについては、以下では特に必要性が認められないかぎり注記しない。
10「私が見て居ても真実の」：「見て居ても真実の」
11「でな。」：「でなア。」
12「ぽつり〳〵」：「ぐづり〳〵」
13「左様」：新・単「然う」
13「会つた為」：岩「会つたため」　「為」を「ため」に替えることは岩に関しては一貫しているので、以下では特に注記しない。
13頁1「可憫しくて」：岩「いぢらしくて」
3「飛んで」：「飛で」

題字カット（2）　新「二の一」～「七の四」の間使用されたもの。

煤烟　二の一　森田草平

26

もの、決して證文に印を捺すのを拒むつもりは無い。勿論私もあんな賣れ殘りの林なぞ當にしちや居ないんだから、阿母さんの好い樣に爲さるが可いのさ。だが、愈抵當に入れて金子を借りると成りや、もつと能く事情も調べた上で、確に見込が着いてからにしたい、れ、左樣でせう、それが至當でせう。」

お絹は返辭をしないで、子供の樣にしやくり上げて泣いて居たが、急に袖で眼を拭つて顏を上げた。

「最う解つたで何も言つてお呉れでない。今度伯父樣が見えたら譯を言つて斷りませう。れ、私も能く得心が行つたで、最う心配してお呉れんが可え。」

要吉もお絹が當て附けたやうな變り方に氣が附かんではないが、別に何とも言はなかつた。

やがて二人は冷えた飯を茶漬にして、飲み込む樣にして食事を終へた。

4「及びません。」：「及びません。其内私が行つて見てやりませう。」
8「枕頭」：新・単「枕上」：岩「枕許」
9「鉦」：「鐘」
11–12「勧進」：新・単「勧化」

14頁2　新「二の一」（一月五日）第一行に相当。
6「お叩頭をした。」：「お叩頭した。」
7「だね。」：新・単「ですね。」
7「取替へる」：新・単「取替へた」
7「か知ら。」：明・岩「か知ら？」
8「御座いません。」：岩「ないわえ。」
＊　身分の上下差を感じさせなくする修正で、同様の傾向は、要吉またはお絹とお倉との会話についても、各段階の改稿に指摘きる。改稿前は、庄屋一家（⇩31頁2）として、周囲より多少高い身分を印象づけようとしていたものか。そうとすれば、『煤煙』が種々の点でモデルにしている『死の勝利』（⇩補注8、23）の主人公の境遇に接近するが、「事実」からはおそらく離れるもので、改筆によってリアリティを増しているといえる。
9「何となく」：新・単「何処となく」
10「凝乎と」：新・単「凝と」　縮に一貫する書き替えなので、以下では特に注記しない。
11「見詰めて居た。」：新・単「見詰めた。」
12「居た」：新・単・岩「ゐた」

三

今朝も空一面に蒼く晴れ渡つた。三反許り昇つた太陽の光線を眞當面に浴びて、要吉は村から長良の町の方へ新道を歩いて行つた。近頃縣道に編入されて道普請をしたので、幅の廣い道が何處までも眞直に續いてゐる。こんな道を少し急ぎ足に歩いてゐると、何時となく胸が廓然として心持の好いものだ。電信線が一本だけ道に沿ふて低う張つてある。それへ幾羽とも數へ切れない雀が行儀よく並んで棲つて居て、人が近づくとぱつと立つ。要吉はそれに氣を取られて、殆ど何も考へないで歩いて居た。

幾度も市場へ野菜を曳いて行く荷車を追ひ越した。其間自分も後から來た郵便脚夫に追附かれた。饅頭笠を被つて、荒い麻の袋を棒の先に結ひ附けて擔いだのが、飛ぶが如くに行つて仕舞つた。要吉は其後ろ影を見送つて居たが、偶と可厭なものが眼に映つたので、俄に惡感でもする樣に足を留めた。

前面の道から十間程横へ入つた大根畠の中に、六坪か七坪の小さい篠竹の藪がある。土俗道

12「大地震」　濃尾地震。一九八一（明24）年10月28日、岐阜県西部を中心に起こった地震。マグニチュード八・〇。死者七、二七三人、全壊家屋一四二、一七七戸。明治以降の関東大震火災に次ぐ大災害といってよい。11歳にして岐阜鷺山でこれを体験した草平は、のちの小説「地震」（『明星』明36・8）にその記憶を書いている。

挿絵（7）：「二の四」（一月八日）

15頁2–3「今の小さい家」　⇩5頁4の注。

4「芽生え」　接ぎ木・挿し木に対して、種から発芽して大きく育成した草木をいう。

7–8「年寄どもが・・・さうな。」：新・単「年寄株が譏った相だ。」

9「十四の歳から東京へ」　草平の経歴に一致。明治28年、岐阜市高等小学校（現・金華小学校）の卒業ともも

三の首塚と稱へて、要吉が小兒の時分には、稲葉山の麓のおぼろが池と共に諸人恐れて近寄らなかつた。藪の中には一基の墓石が半ば土に埋もれてゐると云ふことだが、要吉は嘗て見たことはない。舊記によれば、道三は俗名を齋藤庄九郎といふ。京都の油賣で其性獰惡、美濃に來つて國司土岐氏に客寓して居る間、欺罔つて其一門を鏖しにし、此國を横領した。一時は惡運强く世に時めいたが、老後子の義龍に代を讓つて、其身は別に砦を築いて隱居するに及んで、忽ち仲違ひして父子干戈を交へ、長良川を挿むで陣するに至つた。一戰して道三の軍破れ、幾に身を以て逃るゝ所を、百姓の爲めに竹鎗で突殺された。弘治丙寅二年四月歿す、行年六十五歳とある。其後首は河原に捨てられたが、近臣それを拾つて此所に埋めたといふ。村の百姓は固よりこれだけの事をも知らない。只此藪には道三の執念が何日までも殘つて居て、若し過まつて足を蹈み入れた者があれば、直に怖ろしい祟りがあると言傳へて居る。それも要吉が子供の時分の話で、それから十四五年も經つた今日でも、小學校へ通ふ子供達が道草を喰ひ過ぎて、夕暮れ人顏の朧ろに見え出した時など、矢張此藪陰を狀で頭を隱して駈け拔けるか如何かは分らない。

に、数え年15歳で上京、当時海軍予備校であった攻玉社に入学した。⇩36頁2-6の注。

12「其間には」：明「其中には」：岩「その中には」

12「出来ない上に、」：「出来ないのに、」

16頁5「多くも無い身代」：「多くも無かった財産」

5「薪や柴しか」：「柴しか」

5「少し宛」：新・単「少し宛」

9-10「した。」：新・単「する。」

12「顔を・・・中へ」：「顔を濡して」

12-13「側に」：「側にひとり」

挿絵（8）：「三の一」（一月九日）

何と思つたのか、要吉は前後を見廻して、盜む樣に畑中の小徑を傳つて、此藪へ近づいた。垣根に手をかけて、及び腰に成づて藪の中を覗いて見た。竹に絡つた蔦だの夏草だのが裏枯れて、大分奥の方まで見透かされるが、別に怪しいものも眼に留らなかつた。それでも中へ踏込んで見る氣には成れないと見えて、靜と手を拱いて立つて居た。

此時要吉の眼に明々と泛んだ幻がある。坊主頭の白髮が五分許り延びた、面瘠せて、身丈の圖抜けて高い老婆が七つ許りの男の兒の手を引いて、朝まだ日が上らぬ間に、人目を憚つて狐鼠々々と此藪陰へ近づく。やがて鍬から三寶と土盃とを取出して、御酒を此藪の主に供へた。先づ自分から地に跪づいて、合掌して長い祈念を凝した。それから側に佇ぼん〳〵立つて居る孫にも、自分の通りにせよと敎へた。男の兒はがつ〳〵齒の根を合せながら、敎へられた通り小さい手を合せて拜んだ。老婆は「最うこれで可いぞよ、さあ歸ろ」と言ふ。男の兒は泣出し相な聲で、「お祖母、お祖母」と呼びながら、一生懸命に老婆の手に縋つて、逃出す樣に走つて村の方へ戻つて行く。

此老婆は二十年前に世を去つた要吉の祖母で、男の兒は要吉自身であつた。

17頁1「何うも。」：新・単「如何も。」
2「馳ばれやう」：新・単「馳れやう」
5「所好」：新・単「好き」
6「汁」：新・単「露汁」

7　新「二の二」（一月六日）第一行に相当。
7「お絹は努めて・・・見えた。」
＊　要吉に対するお絹の態度の基調を端的に示す文。息子への負い目が「或関係の男」（同頁9）すなわち「伯父様」（18頁2）の問題に関わることが次第に明らかになる。⇩補注8。
7「努めて」：「つとめて」
8「何うも」：「どうも」
11「要吉の父」　草平の父は森田亀松。天保6年10月10日生まれ。明24年5月22日、50歳で死去。このとき草平は11歳。⇩『友樹』43号（⇩3頁8の注）。
12「成って、」：「成ったので、」
12「来ては、」：「来て、」
13「たゞ」：「単だ」

18頁1「子供で。」：新「小児で、」：明・岩「子供で、」
2「伯父様」：新・単「伯父様」　以下同様なので注記を略す。この人物については、⇩23頁11-12、51頁11〜。
3「仲間」：「中間」
5「あった。」：「あった、」

四年の間、月の初めの朔日には、夏も冬も、この藪陰に此二人の影を見ないことはなかつた。只如何かして朔日に雪が降つたり、雨風の烈しい朝などは、老婆一人で來ることもあつた。老婆は歸りの道すがら孫に向つて言つて聞かせた。「此樣にして毎月お前を連れて來て、道三の墓へお詣りして御詣をするのも、皆お前の祖父樣が餘り氣が荒かつた爲ばかりぢや。あの時私が幾許留めたか知れんのに聞き入れなさらんで、昔から祟りがあると云ふ道三松を到頭伐つてお仕舞ひなされた。それから自宅は道三に祟られたのぢや。」

祖母はこれから後は語らなかつた。要吉の子供ごゝろには何の事とも譯は分らなかつたが、只道三が怖いと云ふことだけが、小兒の頭に深く泌み込んだ。道三といふと、毬栗頭の白い剃刺した鬚の生びた、片眼で色の青黑い大入道の樣に想はれて成らなかつた。明日の朝は又祖母に連れられて、例の處へ行かれば成らぬなと思つて寢ると、其夜は屹度大入道が來て要吉の背中に負ばれやうとした。それに魘されて一時顏色の惡く成つたことさへ有つたが、そんな夢を見たといふことは、祖母を始め誰にも言はなかつた。それを口外すると惡いやうな氣がして居たのである。

8「許り」：「許」
10「さうなが、」：「さうだが、」

10–19頁4「お絹の方に未練があつて・・・如何にでも成るのであつた。」　＊　この6行を、語り手が要吉以外の人物の意識に入り込んだ例外的部分（⇩1頁6–2頁2、162頁12–13の注）と見るか否かは微妙な問題で、先行部分の「有つたさうなが、」（18頁10）が示す「伝聞」の語りとして相変わらず要吉の視点で語られていると見ることも可能だろう。⇩47頁1–6、118頁2–9、163頁7–8、375頁11–377頁12の注。

13–19頁1「持ちながら、手蔓が無いため」：新「持ちながら伝手が無いので」：単「持ちながら、伝手が無いので」
3「正直に」：「正直に」
7「けれども、今」：新・単「けれども今」
7「お絹の」：新・単「お絹が」
8「凝乎と」：新・単「眤と」
10「さのみ」：「左のみ」
10「老け樣」：「老けやう」
11「身躾み」：「身だしなみ」
11–12「黑天鵞絨の・・・白いのや、」：「黑天鵞絨の襟に蒼白い頸筋の際立つたところや、」
12–13「寄つて、紫色に見えるところ」：新・単「寄つて

31

其後誰から聞いたと云ふこともないが、何日となく要吉の知り得た事實を綴合せると、要吉の祖父に當る人で、祖母の連合といふのは此村の里正であつた。若い歳から親の跡目を繼いだので、血氣に任せて我儘な振舞ひをすることも隨分多かつたさうな。或時何のためかは能く分らぬが、道三松を伐らうと言ひ出した。其頃祖母は長良の常願寺といふ寺から嫁に來た當座であつたが、それは餘りなと云ふので、切に留めた。けれども留められると尙張合が有るもので、血氣盛りに祟りなし、退込んで俺の遣口を見て居れと云つたやうな調子で、向聞入る樣子もなく、翌日から杣を傭つて來て、大小三本あつた老松の中で、始めの日は左の一本を伐つた。其日は何事もなかつた。それ見たことかと云ふ樣に勢づいて、次の日も右の一本を倒した。三日目には愈中の一本で、四五百年も經たかと思はれる此大木を伐り倒せば、それでお仕舞ひと云ふのだから、皆朝早くから出掛けた。祖母も其日は流石に氣が弛んで、閑かな日向で張物をして居る所へ、傭はれた杣の一人が息せき切つて驅けて來た。突然祖母の袖を掴むで、「大變だ、大變だ」と許り、何を言ふのか分らなかつた。漸く今此處へ旦那が釣られて戻つて來ると云ふことだけ分つた。祖母は釣切り倒れる松の下に成つて負傷をしたに違ひないと思つたの

薄紫色をしてる所」

13「樣でもあるが、」：新・単「樣であるが、」

13「瘠けて額が抜け上つた」：新・単「瘠けて、額が抜け上つて広く成つた」

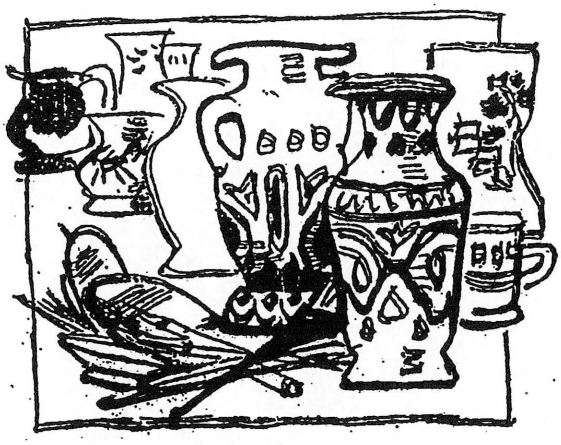
20頁7「屈拕が」：新・単「屈託が」

7「落胆して」：岩「がつかりして」

9　新「二の三」（一月七日。挿絵なし）第一行に相当。

9「お為た」：岩「おした」　岩での改稿として、「為

挿絵（9）：「三の二」（一月一〇日）



で、其儘使の者を捨てゝ置いて、ひとりで躍け出した。途中まで行くと、向ふから祖父が人の肩に擔がれて來るのに出會つた。取敢ず座敷へ擔ぎ入れて蒲團の上に寢かしたが、其時も祖父はまだ正氣を失つて居た。柚は皆異口同音に言つた。今朝も毎もの通り向ひ曳きの大鋸で勢よく伐り込んで、九分通り伐れたところで、いざと云ふので皆片側へ寄つて、此方から綱で引張ると、流石の大木もめき〳〵と軋むで、見る〳〵凄じい地響きを立てゝ倒れたが、怖ろしや、其剰那伐口からぱつと血を噴いた。それが眼に映ると、根元の方に見張つて居た祖父は即座に卒倒して仕舞つた。其場に居合せた者は誰も彼も皆血が噴いたのを見たと言つた。それで自分達も何んな祟りを受けるか知れぬと言つて、青く成つて戰へて居た。祖父はそれから息を吹き返すには返したが、兩眼は其儘盲いて、熱は何日迄も退かなかつた。醫藥も、加治祈禱も、祖母が心づくしの介抱さへ更に驗が見えないで、四十日餘りも惱んだ果に、三十一を一期として息を引取つて仕舞つた。

祖母は其頃懷姙つて居たので、間もなく男の兒を儲けた。元來氣丈な女であつたから、そんな妨碍を力に二十の齒から六十の餘まで、さま〳〵な憂い目辛い目も堪へ忍んで、四十年の間

る」の「する」への、また「為せる」の「させる」への書き替えはほぼ一貫しているので、以下では特に必要性が認められないかぎり注記しない。

9「気遣はし相に」：「気遣はしさうに」　単での改稿として、この用法（助動詞の語幹）の「さう」を「相」と書き替えることはほぼ一貫しているので、以下では特に必要性が認められないかぎり注記しない。

12「来たんだが、」：新・単「来たんだが。」

13「畳んで・・・私も」：新・単「畳んで仕舞つて出掛けては。私も」

21頁1「私もな、」：「私もなア、」

3「暫らく」：「久らく」

5「何れだけ・・・話」：新「金子を千円借りると云ふ様な話」：単「何だけとか借りると云ふ話」

7「出て、」：「出来て、」

8「飛び出して」：新・単「飛び出して、」

8「行方の」：「行方が」

9「蟬」　鷺山東端に現存する地名。現在、公式には「せみ」と読まれるが、現地古老には「せび」と発音する人もあるという。⇩地図1。

9「有つた」：「在つた」

12「俯いたまゝ」：「焦燥しさうに」

13「止めたら」：「止したら」

寡婦を通して來た。其子が生長して、お絹といふ嫁を貰つて、祖母はもう是れで安心して眼が瞑られると云ふ段に成つてから、一生の杖でも柱でもあつた息子が又病癖に親しむ身と成つた。それが人の忌む脱疽といふ病で、永年煩つて、終ひには一間に閉ぢ籠つたまゝ、見るもみじめな最期を遂げた。子息が病氣に罹つた時、一番力を落したのは祖母で、或年京都へ上つて六條の本山に參詣した序に、名高い易者があると聞いて訪れて行つて見て貰つた。易者は祖母の顔を見ると、直ぐに首を振つて、「お前さんはえらい業人だ。何でもお前さんの家では由緒ある樹を伐つたことがあるに相違ない。それがお前さんの家へ代々祟るので、お前さんの息子だけぢやない、孫があれば、孫も同じ樣な病氣に成るか、それが違へば氣が狂つて早死をする。氣の毒ぢやがお前さんの家の血統が絶えなければ、其祟りは退くまいよ」と、圖星を指した樣なことを言つた切りで、向ふを向いたまゝ、後は何を訊いても相手に成つて呉れなかつた。それでは取附く島もないので、必死に成つて願つた末、やう〳〵易者は「まア其祟りの元へ好く詫つて見るのだな。それも驗が有るか無いか、私は請合はぬ」と言つた。それだけの言葉の端を手頼にして、祖母は著く成つて故郷へ戻つて來た。それからである、祖母が世を終るまで、毎月

22頁1「来たのですからね。」：「来たんだ。」
2「青山様」　名古屋東郊長久手村の豪農、青山儀右衛門（一七九六―一八九〇）またはその遺族を指すか。名家の書画を多く所蔵した。⇩『角川日本姓氏歴史人物大辞典23』、角川書店、平3。
2「お払下げ」：「お払ひ下げ」
5「打たなけりや」：新・単「打たにや」
7「だつて、」：新・単「だつて」
8「払下げ」：「払ひ下げ」
10「そんな」：「其んな」
10―11「此間私も」：「先達も」
挿絵（10）：「三の三」（一月一一日）

の朔日には、雨の日も風の日も、人目を避けて此道三の墓へ詣るやうに成つたのは。

小さい時は、要吉も實際祖母の云ふ通り左様いふ祟りや呪ひが有るものと信じて居た。世の中は只眞暗に見えた。自分の一生は、雨のしよぼ〳〵降る晩に、野中の細道を提灯一つ力にとぼ〳〵辿るやうな氣がして心細かつた。祖母は八つの歳に死別れた。それからは母親の手一つで育つて、隨分甘やかされたが、如何いふものかお絹には餘り懐かなかつた。お絹が例の伯父様と一緒に岐阜の町へ出掛けて歸宅の遲い時なぞは、子供心の寂しさに、門の柱に凭れながら獄つてひろ〳〵とした野末を眺めて居た。冷たい涙が二筋頰を傳つて流れる。こんな時には歸つて來ない母よりも、死んだ祖母が戀しく成つて、聲を出して「お祖母、お祖母」と呼んで見たこともあつた。

瓦長じては、そんな家の祟りと云ふやうなものに對する恐怖の念は薄らいだが、其代り疾病の遺傳が有りはせぬかと云ふことが氣にかゝり出した。手を切り足を斷ち、木の斷株の様に癒た切りで、何から何まで人の世話に成つて、それでぢり〳〵と命數の盡きるのを待つ。そんな事が堪へられやうか。いや左様成るまで、斯うして手を束ねて待つて居る方が、猶更堪へら

11「一双で」：新・単「一番で」
11「云ふんでな、」：新・単「云ふんで、」
13「成れません。」：明「成れませんね。」：岩「なれませんね。」

23頁1「斯う」：新・単　0：岩「かう」　岩での改稿として、「斯う」の「かう」への書き替えはほぼ一貫しているので、以下では特に注記しない。
1–2「仕舞つた。／」：「仕舞つた。」［改行なし］
3「面白うなうてな。」：新・単「面白くないでな。」
3「不可ん」：新・単「行かん」
6「左様ぢやらうな」：新・単「左様だらうねえ」
6「吐いた。」：新・単「ついた。」
7「伯父」：「伯父様」　⇩18頁2の注。
7「七宝焼」　銅・金・銀などを下地にして、面にくぼみをつくり、そこに金属の酸化物を着色剤として用いた透明または半透明のガラス質の釉を埋め、それを焼き付けて花鳥、人物など種々の模様を表わし出したもの。天保年間の尾張に始まり、幕末以降盛んになった。⇩挿絵（9）。
7「居たのであるが、」：「居たのであるが」
8「されぬ所へ」：新・単「されぬ所へ、」
10「それと共に」：「それと共に、」
12「老画工の血を別けた子」：新・単「老画工の子」
⇩51頁11〜、補注8、9。
12–13「流石に言はない」：「流石に避けて云はない」

35

れない。眞夜中偶と眼を醒まして、蒲團の上に坐つたまゝ、生甲斐のない前途を想像して、戰慄したことも何度有るか知れぬ。其都度父のことを憶ひ出しては思ひ返した。其通りの生涯を經て通つた人が、既に自分の前に有るのではないか。自分は其不幸な父が侘しい晩年の、唯一の慰藉であり希望でもあつたと云ふではないか。それだけでも自分が此世へ生れて來た甲斐はある。自分と云ふ者が此世に存在した意味はある。假令父と運命を共にし數奇を分つとも、父の爲に犧牲と成つたと思へば、悔ゆる所はないとまで思ひ詰めた。

父の俤と云つては、直接要吉の記憶には殘つて居なかつた。が、其頃父の按摩を頻まれて來い〳〵したお倉のお袋がいろ〳〵話して聞かせて呉れた。この婆の話に依ると、要吉が生れる迄は、父は飽迄家の跡目が自分一代で絶える覺悟をして、人から養子など勸められても、頑として聞入れなかつたさうだ。それで生前から氣に入つた小作人に家屋敷や田地を分けて遣りなどした。それが子供の顔を見てから急に思ひ止まつたと云ふことである。要吉は此話を聞いて父が自分を生れるものと思つて居なかつたと知つた時には、何とも名狀し難い妙な心持がした。父は其身限りで小島の家の血統が絶えるものと思つて居た。或は絶やさうと計つて居たのかも

24頁1　**新「二の三」（一月七日）**了。この日はこの年最初の木曜日で、漱石宅では恒例の「木曜会」がもたれた。草平は「仲間の評判を聞きに伺ったやうな気がする。が、或ひはこれは私の覚へ違ひで・・・」（『漱石』下、76頁）と回想しているが、「覚へ違ひ」であったことは、小宮豊隆日記の以下の記述に明らか。「草平を訪問して『煤煙』を褒める。草平は、自分のハガキが『煤煙』に関する最初の批評だったと言って、喜んでゐた。先生のをまだ読んでゐないのである。その由を教へる。」（『漱石研究年表』499頁）「先生の」は漱石の孤蝶宛葉書（⇩7頁11行の注）。

2　**新「二の四」（一月八日）**第一行に相当。

2「突留めて」：新・単「突留めて、」
2「勇気が」：新・単「勇気は」
2「成るたけ」：新・単「成るべく」
4「亡父の俤」⇩補注9。
6「忠実に」：「忠実に」
8「阿父様」：新・単「阿父様」
8「訊いた。」：新「云つた。」：単「言つた。」
9「見返したが、」：「見返たが、」
10「ぢやつたらうな。」：新「ぢやつたらうね」と答へた。」：単「ぢやつたらうね。」
12「私が」：「私が？」
12「居るって、」：「居るって？」

知れない。「只一代延びた」と、要吉は冷やかに考へた。

要吉が東京へ出たのは、最初陸軍に身を投ずるためであつた。恰度日清戰爭が終つた頃で、地雷火の洗禮を受けて、身體が跡方もなく粉碎されると云ふことが心を慰いたのだ。が、間もなく其志望を放棄した。陸軍へ遣入ると云ふことは、身體が木の斷株に成る前に、先づ頭が木の斷株に成らなけりやならぬことが解つたからだ。陸軍の方でも要吉の樣な士官を得なかつたのは勿怪の幸ひだらう。

一年振りで歸省した時には、前とは大分心持も變つて居た。此夏要吉は例の婆から一大事を聞いて仕舞つた。或は其頃の家の亂脈を見兼れたのかも知れぬが、或日要吉に向つて斯んな事を言つた。「先の旦那は本當に氣の寬大な人ぢやつた。世間では お絹さまの惡い噂が立つて、要吉だつて誰の子か分るもんぢやない、其證據には些とも似て居らんぢやないかと、そんな事を言ひ觸らして居ると告げたら、只寂し相に顰矢ひして、私の宅で私の家内が生んだのぢや、私の子に相違ないではないかと言つた切りで、相手に成らず、餘計な告口したやうで、却て此方の顏が赧く成つた」と。婆は別段何とも思つて居ないのであらう、こんな事を平氣で言つたが、

25頁1「が、又」：新・単「然うかと思ふと又」

挿絵（11）：「三の四」（一月一二日）

2「私はこれでも・・・」　＊　母が亡夫をおろそかにしていなかったことを草平は書きとめている。明治39年の10月、漱石に自分の出生の秘密（⇩51頁11の注、補注9）を告白した際のこととして次の記述。「私はたゞ私が十一の年に死んだ父親を尊敬してゐるといふことが云ひたかった。私の母は馬鹿だ！　それこそ教育も何にもない、取るに足りない田舎の婆である。しかし、私を教育するためには何物も惜しまなかった。家も田地も売払った。が、そんな事は何うでもいゝ。もと〳〵父親が「俺の死んだ後

37

聞いた要吉は足下の大地が墜り落ちて行くやうな氣がした。此上聞糺して見る勇氣は出なかつた。其後も此事については何人とも口を利いたことがない。今でも未だ婆の言つたことを虚僞とも眞實とも思ひ定めては居らぬ。何方も可厭であるが、何方にしても一身の破滅は免れない。只人間は何んな境遇にも慣れて仕舞ふものである。其後の要吉が放縱な生活は、其時すべての理想に對する信仰を失つた爲だとは、流石に自分でも考へることを恥ぢて居た。

それが今通りすがりに、久らく忘れて仕舞つて居た道三の首塚が目に着くと、自から祖母の俤が眼に泛んだ。六七十年前に此藪蔭で起つたといふ家の悲劇が憶ひ出される。松の樹の幹から血を噴いた。そんな事が有るものかとは、要吉には如何しても思ひ切れない。それは恐らく一種の幻覺でもあつたらう。けれども祖父は確にそれを見たのだ。その爲に生命まで取られたのだ。祖父で無かつたら、そんな血は見えなかつたかも知れぬ。けれども祖父に取つて、松の樹を伐つて血が出るのは、人の腕を切つて血が出るよりも確な事實であつたのだ。祖母は堅くそれを信じて居た。父は分らない。が、其人は生きながら影に成つた魂を見る樣な人であつた。要吉も此家傳の譫妄を免れぬのではなからうか。昔、祖母が此墓の前へ連れて來て手を合せはお前達の勝手にせよ」と云ひ残して置いた、僅か許りの遺産である。で、何一つ取柄のない女ではあるが、たゞ一つ私をして父親を尊敬せしめるやうに少年時代から仕向けてくれた。身の恥も忘れて、何も彼も私に打ち明けてくれた――それだけは母親を難有いと思つてゐる。」（『漱石』上、229–230頁）。

2「けれど、」：新・単「けれども」
3「自宅」：新「内」：単「家」：明・岩「自家」
4–5「上げられんが――」：新「上げられないが。」：単「上げられんが。」
6「言ひ出しちや居ない。」：「云ひ出してや為ない。」
8「自宅」：新・単「内」
9「何うも」：新・単「どうも」
10「段々泣声に成つて」：「泣声で」
12「泣かなくとも」：新・単「泣かなくても」

26頁1「林なぞ」：「山林なんぞ」
2「為さる」：新・単「為なさる」
2「抵当に」：「抵当を」
6「拭つて」：「拭つて、」
8「何も」：新・岩「何にも」
11「終へた。」：新・単「卒へた。」

27頁2　**新「三の一」（一月九日）**第一行に相当。
2「真当面に」：新・単「真面に」

て拜ませた時、小さい心に種子を蒔いたのだ。何日かは其種子が芽を吹かずには止むまい。

要吉は組んで居た手を解いて、念の爲に小藪を一周りして見た。それから又元の所へ出て、だらりと手を垂れたまゝ立つて居た。

「要様、何してるのぢやな、そんな處に立つて？」

不意に聲を掛けられたので、要吉はぎくりとして振返つた。お倉が道から此方を向いて立つて居た。

「え、なに」と、要吉は腥ひて何氣ない顏をして、畑の畔を傳つて道の上へ戻つて來た。

お倉は今土の中から引いた許りの蕪菁を一杯詰めた手籃を提げて居た。裾を高く端折つた下から白い腰卷を見せて、朝露に濡れた脛には菜の枯葉がへばり着いてゐる。

「早うから何處へお出掛けやアした？」

「うむ、一寸常願寺まで。」

此寺は祖母の生れた家であるが、又隅江の實家でもある。要吉と隅江とは又從兄妹同士で有つた。

3「新道」　県道岐阜稲富線（現・県道岐阜大野線）。明治38年着工、40年開通。現在の鷺山小学校前を東進して長良北町に至る。⇩地図1。

3「編入されて」：「編入されて、」　昭和30年

8「市場へ野菜を曳いて行く荷車・・・」　代まで当地によく見られた風景という。鷺山村が大根の特産地であったことは天保9年村明細帳に記載がある。

8「其間」：新・単「其内」

8「後から」：「背後から」

8–9「追附かれた。」：新「追ひつかれた。」：単「追つかれた。」

10「後ろ影」：新・単「うしろ影」

10「映つた」：「映た」

12–28頁1「土俗道三の首塚」⇩地図1、補注7。

1「稲葉山」　金華山（⇩地図1）の別名。

1「おぼろが池」　金華山麓の御手洗池か。⇩地図1。

7「行年六十五歳」：「生年六十三歳」　斎藤道三の生年は、明応3年（一四九四）と永正元年（一五〇四）との両説があり、死没は弘治2年（一五五六）であるから、行年は前説では満63歳、後説では満53歳となる（⇩吉川弘文館刊『国史大辞典』第六巻、昭60）。

8–9「固より」：「固り」

10「直に」：「直に」

10「居る。」：「居た。」

39

「あゝ、お在所へ。何かな、隅さまは貴方が此方へお出のこと最う知つて見えるかな。」

「いや、未だ知るまい。」

「ま、それぢや早う行つてお上げなさい。そりやア可愛らしいんですよ。見やしたら、屹度連れて行きたく成る位だに。」

「赤ン坊かい。」

「えゝ。一寸何んな氣持がするの、譬方てえものは？」

「何が。」

「始めて子持に成つてさ。」

「左樣され」と言つたが、「成程、お前は子供を生んだ覺えが無いんだね。如何だい、遣らうか。」

「そんな事言ふもんぢや有りませんよ、冗談にも。大切なお兒を私等風情に」と、お倉は眞面目で言つた。

「だが、子供は眞個一人欲しいと思ふことが有りますれ。亭主なんざ一生欲しいとは思ひませ

12「時など、」：新・単「時などは、」

29頁1「何と思ったのか、要吉は」　＊　語り手の意識が要吉のそれと完全に一致しているわけではないことを示す表現。のちにも度々現れる。（⇩18頁10―19頁4の注）

3「奥の方」：「中の方」

5「五分」：「一分」

13「二十年前」：新・単「廿年前」

13「要吉の祖母」　草平の祖母は、きの。福光村（⇩地図1）出身、明22年、76歳で死去（⇩『友樹』43号〈3頁8の注〉）。「二十年前に世を去った」点で一致。

30頁1　**新「三の二」（一月一〇日）**第一行に相当。

1「月の初めの」：「毎月月の初めの」

1「この藪蔭」：「此藪蔭」

2「一人で」：「ひとりで」

6「祟られたのちや。」：新・単「祟られたのぢや。」

9「成らなかった。」：新・単「ならなかった。」

10「行かねば成らぬな」：新・単「行かねばならぬな」

31頁1「云ふこと」：新・単「云ふと」　新・単では以下でも変体がな「と」の使用が時折見られるが、ほとんどの場合は「こと」と書かれており、この差異に意味も見いだせないので、以下では特に注記しない。

1―2「要吉の祖父」　草平の祖父は森田大蔵。⇩『友

んが。」

「そんな者かい。」

「だつて」と、何やら言ひ掛けたが、不圖氣を變へて、「今夜彼方でお泊りやアすか。」

「いや歸るつもりだ。何故？」

「何故と云ふことも有りませんが」と、お倉は言葉を濁して「阿父さが、今頃旬外れの鮎が拾れたで差上げたいと云つてましたから——」

「それは有難う。ぢや又。」

要吉は踵を回して五六歩踏み出したが、お倉が又「ちよいと、〳〵」と呼んだので振返つた。

お倉はうそ〳〵笑ひながら戻つて來たが、何と思つたか壁を潜めて、「貴方、東京で何か隅さまに心配させやしたことが有るんぢや無いか。」

「何を言つてるんだな」と、要吉は事もなげに斥けたが、お倉の眼附を見ると又氣に成るので、

「隅江が何か お前に言つたのかい。」

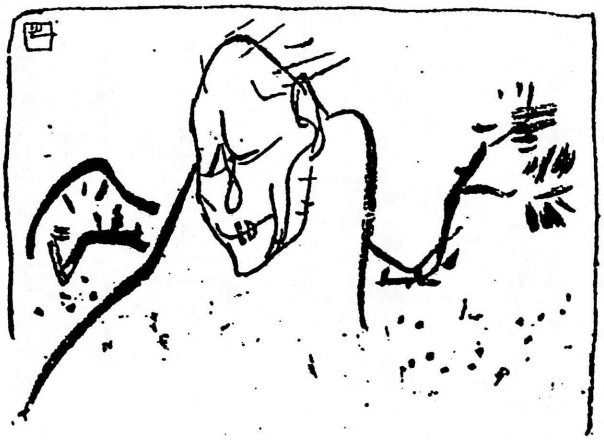
「いゝえ、何も聞きやしません。ですが、そんな事位私が見りや大抵解りまさアれ。」

樹』43号（⇩3頁8の注）。

2「里正」：岩「庄屋」

4「常願寺」　＊この名前の寺院は現存しない。鷺山には、草平の父が山門を寄進したとされる法光寺（⇩地図1）があり、これが作者の念頭にあったかもしれないが、草平の祖母はそこの出身ではない。⇩29頁13の注。

挿絵（13）：「三の五」（一月一三日）



6「退込んで」：新・単「退込んで」

6「見て居れ」：新・単「見てをれ」

41

「莫伽な」と、要吉は空嘯いた。

「そんな事如何でも可いに、早う行つてちつしやい。左樣なら」と、お倉は尻上りに言つて、後も向かずに、村の方へ歸つて行つた。

お倉に別れると要吉の心は又沈んだ。自分は既に人の親であると思ふと、それが今始めて起りでもした樣に愕かれる。父は其身一代で家の跡を斷たうとした。そこへ自分と云ふ者が生れて、父は其生涯の祕密を抱いたまゝ死んで行つた。切めて自分の代には父の志を果さうと決心したことも有つた。それが矢張知らぬ間に——若し左樣云ふことを許されるなら——知らぬ間に次の代が出來て仕舞つた。生れて來る子は、何も知らずに、此呪はれた家の一員と成つて、其小さい肩に家の呪詛を分けて擔はればならぬ。斯う成れば最う手の下しやうは無い。生命の流れは今後幾萬年を經て、時の流れの悉きるまで續くかも知れぬ。斯う考へて來て、要吉は思はず兩手で胸を搔抱いた。強い恐怖の念に襲はれたのだ。死は不可思議である、而も生は更に不可思議である。其測り難い神祕に、これから行つて面の當り會はなければ成らぬ。

要吉は幾度も途の上で振返つた。何だか怖ろしい物を避けて見ないで居る樣にも思はれて、

7「杣」　材木にする木を植えた杣山の木をを切り出す職業の人。

12「釣られて」　ここでの「釣る」は「持ち上げて運ぶ」の意味で、濃尾地方で今日も一般的な用法。

32頁2「担ぎ入れて」：「担ぎ入れ」

12　新「三の三」（一月一一日）第一行に相当。

13「二十」：新「廿一」：単「廿」

33頁2「息子」：新・単「子息」

3「脱疽」　壊疽。局所的に壊死した組織の表面が黒変した状態。ハンセン病（癩病）の主症状として知られていた。⇩補注34頁11の注。

5「聞いて・・・貰つた。」：新「聞いて、訪ねて行って貰った。」：単「聞いて訪ねて行って見て貰った。」

6-9「お前さんは・・・退くまいよ。」

＊　後段の展開への伏線をなす不吉な予言として置かれている。「業人」は、単でのみ55頁9-56頁1の「業」に呼応していた（この「業」は新では「罪」であり、縮以降は「因果」に替えられた。⇩55頁9-の注）。「病気」が子孫に伝わり、「血筋が絶える」まで「祟りは退」かないという易者の断定はそれ自体非科学的としても、その「病気」すなわち「癩病」の遺伝性は当時広く信じられていたところなので（⇩34頁11の注）、当時の一般的「科学」とも合致

42

氣が指して、故に眼を放つて前の小藪を見遣つた。小藪は光の波の漾ふ中に、只靜かに黙く立つて居た。

し、拘束性を増すことになる。「同じ様な病気に成る」か狂死するかとされた「孫」に当たる要吉は、第二部以降これに似た岐路の周辺をさまよい、さらにその子、夏子は実際に「早死に」することになる（⇩補注46）。

6「えらい」：新・単「えらい」

6、9「家」：「宅」

7「家」：新・単「宅」

8「気の毒ぢやが」：「気の毒ぢやが、」

11「必死に」：新・単「祖母は必死に」

11「やう〳〵易者は」：新・単「易者は」

34頁2「呪ひのある」：「呪ひが有る」

4「やうな気がして」：「やうな、気がして、」

4「祖母は八つの歳に死に別れた。」　草平における事実と一致。⇩29頁13の注。

6「出掛けて」：新・単「出掛けて、」

6「凭れながら」：新・単「凭れながら、」

11「疾病の遺伝」　＊ハンセン病（癩病）は、一八七九年のG・H・A・ハンセンによる癩菌の発見まで、広く遺伝病と信じられ、発見後も民間に偏見が長く残った。たとえば代表的な啓蒙家、福沢諭吉は、「遺伝之能力」（『時事新報』一八八二〈明15〉・3・25）において「肺病、癩病、梅毒、癲狂等の諸病は、親子相伝へ兄弟姉妹其質を共にして之を免かるゝこと難し」と述べたが、明治29-30年に至ってなお「近似の医説に結核癩病等は遺伝に非ずと

陸

やがて要吉は柱を赤く塗つた寺の門をくゞつた。本堂の屋根に草が一二本立つたまゝ枯れたのが眼に着く。正面の雨垂れ落ちに鑄物の天水桶が据ゑてある。近寄つて中を覗くと、足の長い蟲が育く溺んだ水の上を彼方此方走つて居る。それを見詰めたまゝ、何の爲にこんな處へ來たか忘れて仕舞ひたいやうな心持に成つた。

森とした寺内で俄に犬が氣立ましく吠え出した。要吉は自分が吠えられる樣な氣がして、ふいと顔を上げると、庫裡の戸口にぼろ〳〵の襤褸を下げた乞食が一人立つて居た。犬はそれを遠卷に吠える。戸の中から女が手を出して、盆の米を袋の中へ明けて遣つた。乞食はそれを貰つて袋の口を緊めると、遽てゝ逃げるやうに門の方へ出て行く。内からしッ〳〵と犬を制する聲がした。それでも却々吠え止まぬので、盆を持つたまゝ隅江が出て來たが、

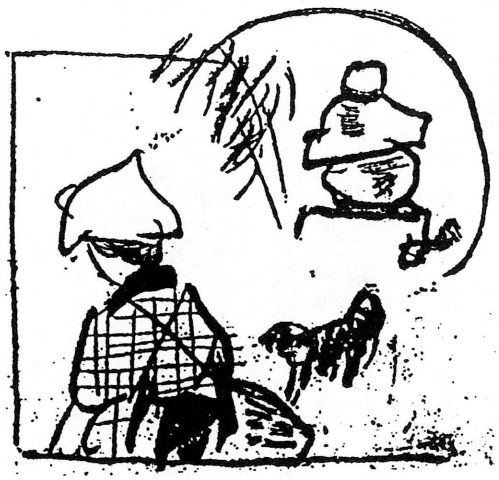
「まア」と、眼を睜つた。

要吉は女の側へ近寄つた。

云ふも、其感受の体質は遺伝と云はざるを得ず」と主張し、「其発病者の子孫能く注意して、凡そ四代を経過して無事なれば先天の痕跡なきに至ると云ふ」と説いている（『福翁百話』七十二話、『明治文学全集』第8巻、196、199頁。⇩福田眞人『結核の文化史』〈名古屋大学出版会、一九九五〉57、129頁。⇩補注5）

この主題を発展させた草平後年の長編『輪廻』（⇩8頁8の注。補注26）も、癩病の遺伝性を前提として構想されている。この点の問題性を指摘した大西巨人は、一九一〇年代の「一高嘱託医」までがその遺伝性を信じるものとし

挿絵（14）：「四の一」（一月一四日）



「あの犬は自宅に飼つてゐるのか。」

「いゝえ、角の床屋の犬ぢやさうですが、始終自宅へ來て居て、人樣に吠え着くので困つて仕舞ひます。」

斯う言ひ〳〵隅江は前に立つて戸口を入つたが、戸外から來た者は眼がぼつとして、家の中が薄暗い。樣の高い上り框には、黒塗の枠の腰高障子が閉めてあつた。それを開けると、又ぱつと明るい。

要吉は靴を脱いで上つた。今迄其處で隅江が針仕事をして居たものと見えて、紅い唐縮緬の鏡を取つた座蒲團の周圍に、縫ひかけの紅絹の裏が放り出されて、抽斗を抜いた儘の針箱だの糸卷だの鋏だのが散らばつてゐる。が、此處へ上ると直ぐに要吉の眼を引いたのは、樣側の方を枕にして、小さい蒲團の下に寢かされたもので有つた。被げた蒲團が渦高いので、顔は未だ見えない。其間隅江が奥から座蒲團を持つて來て勧めたので、要吉は默つて其上に坐つた。

「まア何日お歸りやアした。些とも存じませんでしたが——」

「一昨日の晩着いたばかりだ。急に思ひ立つたので知せる暇が無かつた。」

て描かれている以上、「諸登場人物については、問うだけ野暮である」、そしてそれは「当代社会の現実的な文学的反映であり得る」としている。（「ハンゼン氏病問題　その歴史と現実、その文学との関係」『新日本文学』一九五七・7—8）

13「猶更」：新・単「尚更」

35頁3「有るのではないか。」：「在るではないか。」

5「仮令」：「仮令」

5「運命」　＊「境遇」（37頁4）とともに作品のキー・ワードの一つ。⇩37頁4の注。

5「共にし」：「共にした」

7　**新「三の四」（一月一二日）**第一行に相当。

7—8「が、其頃・・・お袋が」：「けれども其頃始終父の按摩を頼まれて来たお倉のお袋が、」

10—11「それで・・・などした。」：「で、生前から小作人に家屋敷を与ったり、片端から耕地を分与したりした。」

11「聞いて」：新・単「聞いて、」

36頁1「知れない。」：新・単「知れぬ。」

2—6「要吉が東京へ・・・幸ひだらう。」

＊　要吉の軍人志望は、草平における事実と符合。ただし陸軍でなく海軍で、明治28年、15歳で高等小学校を卒業すると、単身上京し、当時海軍予備学校であった攻玉社に入

45

「まア好かつた」と、隅江は何日にない嬉し相な顏をして、「あんなお手紙でしたけれど、それでも一遍來てお呉れやアすと可えがと、何の位思つて居たか知れませんわなも。」

要吉は返辭をしなかつた。兩人の視線は申合せた樣に小さい薄團の方へ注がれた。足許が少しうごめく樣である。

「最う見て遣つて頂戴したか。」

「うゝむ」と、笑つて頭を振つた。

隅江は薄團の側へ擦寄つて、上から平手で竊と叩いた。要吉も及び腰に成つて枕元を覗き込んだ。薄赤い頭の毛がもぢや〳〵と生えて、顏の少し膨んだ小さな生物が見える。何だか怖しい物でも見たやうに、要吉は急いで身體を退いた。何うもこれを見て親子と云ふやうな心持は起らない。それが世間の人は左樣でないのに、自分一人起らない樣に思はれて、何となく氣が咎めもした。

子供は薄目をして唾つたまゝ、呼吸もしない樣に見えたが、時々うつゝで口を窄めて、乳を吸ふやうにびく〳〵させた。

学した。「日清戦争戦勝の興奮が岐阜の寒村にも流れて」（伊藤孝子「森田草平」『学苑』昭30・8）という世情、「費用少なくて仕官の途を求めむがため」（草平自筆年譜、『現代日本文学全集』第42巻、改造社、昭5）という経済事情、また当人の述懐する「忠君愛国の思想に燃えたと云ふのではなくて」「非常なロマンチックな考え方から水雷にでもあって、ぶかぶか死んでしまうのが一番いいという気持」（「往時茫々」『日本評論』昭24・12）などが重なっての選択であったらしい。⇩根岸『森田』、10頁。

2「要吉が」：新・単「其後要吉が」

2「最初」：新・単　0

2「投ずるため」：新・単「投ずる意」

10–11「ぢやないかと、・・・居ると」：新・単「ぢやないか、と云ふ樣なことを言ひ触らしてると」

37頁2「ない。」：新・単「無い。」

3「居らぬ。」：「居らぬ、」

3「免れない」：新・単「免れないやうだ」

4「境遇」　＊　前出の「運命」（35頁5）とほぼ同義に用いられ、作品のキー・ワードの一つ。やがて要吉は朋子に自分と「類似の点」（192頁12）、「同じ様な運命」（212頁12）を見いだしてゆく。⇩補注6。

9「幻覚でもあつたらう。」：「幻覚でも有つたらう」

「幻覚」は要吉の「家の悲劇」（同頁7）と女主人公、朋子を結ぶ要素の一つとなる。⇩同頁13の注、補注44。

「お夏ちやん、もう起きなさい」と、相手に解るやうな物言ひをして、隅江は子供の背へ手を廻して抱き上げた。未だ頸が据らぬのか動かす度にぐら〳〵して、見る眼に危な相である。要吉は思はず手を出して留めやうとした。

「さ、眼々開いて、此方向いて御覧。これ誰方だえ、誰方か解るかえ」と、隅江は男の方を向かせて、子供に親の顔を見せる様にした。

要吉は默つて母兒を見た。頭の中を往來した心持は自分にも解らなかつた。

其時急に小兒が顔を蹙めたかと思ふと、形に似合はぬ大きな嚏をした。

「嚏したの、お夏ちやん。大人の爲る樣なこと何でも爲ますわね」と、隅江は子供の顔を覗いて嬉しさうにした。

「お前、子供が可愛いか」と、突然要吉が附かぬ事を訊いた。

「ま、面白いこと言やアすなも」と、隅江は惘れて眼を瞬つた。

要吉は笑はなかつた。

「可愛う御座いますわな」と、隅江は伏目に成つて、小兒の頭の毛の中へ唇を押附けたまゝ言つ

10「祖父に取つて、」：「祖父に取つては、」

11「であつたのだ。」：「で有つたのだ、」

12「が、・・・であつた。」：「が、其人自ら目に見えぬ世に住む霊魂の影に過ぎない様なんであつた。」

13「譫妄」：明・岩「幻惑」　「デリリユーム」の原語はdelirium（英語）。意識障害の状態の一つで、外界からの刺激に対する反応は失われ、興奮・幻覚・妄想・不安などの症状を呈する。精神病理学用語で、草平も参看した可能性のあるマックス・ノルダウのDegenerationに用例が見られる（⇩補注5）。「幻覚」（同頁9、新）とともに、この領域への語り手の造詣をほのめかす言葉遣い。

38頁1「芽を吹かずには」：新・単「生えずには」

2　新「三の五」（一月一三日）第一行に相当。

4「・・・立つて？」：新「・・・茫然立つて。」：単「・・・立つて。」

9「へばり着いてゐる。」：「へばり着いた。お供にはちやんと大きな尨犬が随いて居る。」

10「やアした？」：新・単「やアした。」

12「実家でもある。」：新・単「実家でもあるのだ。」

12「又従兄妹同士」　隅江のモデルつねは、草平と血縁なく、実家も長良ではない。⇩3頁8の注。

39頁1「知つて見える」　「見える」は濃尾地方方言で「いる」の尊敬語。関西弁の「はる」に大体相当する。

た。何故そんな事を訊くのか、要吉の心持は隅江には解らない。これ迄も男の心の中で考へることが、自分なぞの考へとは段々懸離れて、寄附かれないやうな氣は始終して居た。けれども小兒に對してさへ、自分と一つ心持には成つて呉れぬのかと思ふと、今更寄邊ないやうな氣がして成らぬ。それに伴れて、去年東京へ出てから半歳の間の辛かつたこと、心細かつた事などが順繰りに憶ひ出されるが、恨むことも喞つことも知らない女は、矢張默つて俯向いて居る外はない。

要吉も女の顔の曇つたのが眼に着いた。直ぐ女の胸で思つて居さうな事が心に泛ぶ。それが如何して遣ることも、如何して貰ふことも出來ないやうな氣がする。斯う成ると、要吉の樣な毎も境遇に支配されて、自分で境遇を作ることの出來ない男は、むら〳〵と力の抜けた怒氣を發して、如何とも成らば成れと投げやる外は無かつた。

暫らく兩人の談話が途切れた。

樣側の障子は眩しいほど明るい。茄子の帶を絲で繫いで廂に釣したのが、風の吹く度にかさかさと障子に觸つて、其影が長く成つたり短く成つたりする。要吉はそれを見詰めて居た。

4「成る位だに。」：新・単「成るに。」
6「するの、」：単「するもんです、」：「するんです、」
9「左様さね」：単「左様さね、」：「然うさね、」
9「成程、」：単「成程」：「成る程」
9「子供」：「小兒」　単でのこの書き替えは一貫しているので、以下では注記しない。
13「だが、」：新・単「ぢやが」
13「真個」：「全く」
13「有りますね。」：新・単「有りますわ。」：明「有りますよ。」：岩「ありますよ。」

40頁1「亭主なんざ・・・思ひませんが。」：新・単「亭主なんざ欲しいと思ったことはありませんが。」
2「者かい。」：新・単「者かね。」：岩「ものかい。」
3「だって」・・・変へて」：新・単「そんな者かねと仰有るが」と云ひ掛けたが、気を変へて」
4「帰るつもりだ。何故？」：「帰る。何故。」
5「何故と・・・」・・・濁して」：0
5-6「今頃・・・から――」：「好い鯉が有るで上げたいてなこと云ってましたから。」
8「踏み出した」：「踏み出た」
8／9＝0：「ずっと前へ駆けて行った犬まで、お倉の留ったのを見て又駆け戻って来た。」
9「お倉は・・・潜めて、」：「お倉は要吉の側へ近寄って来たが、何と思ったか声を低めて、」

其間子供が泣き出したので振向いたが、隅江は子供を抱へたまゝ此方を向いて居た。要吉が振返ると、急に眼を反して、牛乳の吸口を小兒の口に含ませた。髪も濃く成つた樣であるし、一體に窶れた所爲か、以前は左程でもなかつた黒斑が目に立つて、顏が汚なく見える。元からはき附かぬ質の女ではあつたが、産後の爲でもあらう、いかにも容子が懶る相で、これでも嘗て要吉が放縱な空想をゑがく對象に成つた女だとは、如何しても思はれない。

「身體はもう快いのか」と、つい釣込まれて要吉は優しく訊いた。

「最う大抵快く成りましたが、未だ如何かすると眩暈がして——」

「それぢや暖かく成るまで、悠然此地で養生して歸るが可い。」

「えゝ」と聞えない位の聲で言つたが、少時してから、「今度は何時頃迄此方にお坐やアすなも。」

「さ、用事が濟めば直ぐ歸る積りだ。」

「左樣も急いでお歸りやアすのかな。阿父さんも一度會ひたがつてだに。」

「先刻から見えぬと思つて居たが、今留守かい。」

10「させやした」：「させやアした」
挿絵（15）：「四の二」（一月一五日）

11「言ってるんだな」：新「云ってるんだ」：単「言ってるんだ」
11「事もなげに」：新・単「一口に」
11「又」：新・単　0
13「ですが、そんな」：新「けれど其んな」：単「そんな」
13「私が見りや」：新・単「私の眼で見りや」

「伊勢の一身田の方へなも、此間から――」

「左様か、そりや殘念だ。」

「けども阿母さんは直き歸ります。」

「さア今日は左様もして居られない。一寸岐阜へも廻る用があるから」とは言つたが、急に立上る様子もなかつた。

何時迄話して居ても、別に變つた話の種子があるでもなければ、又一向談話も冴えない。要吉は物足らなかつた。それが皆自分の所爲であると思ひながら、矢張物足らなかつた。男と女とが差向ひで坐つて、誰の前で談しても差支のないやうな話でなけりや出來なく成る、それで子供だけは生む。これが世間一通りの夫婦と云ふものであらう。要吉は取返しの附かぬ物を落して來たやうな心持がした。

暫らくすると隅江の母親といふ人が戻つて來た。寺のお庫裡などには似合はない、至つて無愛想な機嫌買ひの女で、角嶺で鼻梁に節のあるのが要吉の氣に喰はなかつた。隅江が其子で矢張鼻梁に節があるのを平常から氣にして居た。

49

41頁2「らつしやい。」：新・単「らつしやいまし、」
3「向かずに、」：新・単「向かないで」
3「帰つて」：「戻つて」
7「許されるなら」：新・単「許されたら」
8「知らずに、」：新・単「知らないで、」
9「斯う成れば」：新・単「既う斯う成れば」
9「無い。」：「無い、」
11「搔抱いた。」：「抱いた。」
13「要吉は幾度も途の上で」：新「途上、要吉は幾度も」：単「途上要吉は幾度も」
13「居る様にも」：新・単「居る様に」

42頁1「指して、」：新・単「指すので、」
1「見遣つた。」：新・単「見た。」
2「居た。」：新・単「ゐる。」

43頁2　新「四の一」（一月一四日）第一行に相当。44
2「やがて要吉は」：「要吉はやがて」
4「彼方此方」：新・単「彼方此方に」
4「それ」：「夫」　単でのこの書き替えは一貫しているので、以下では注記しない。
4-5「来たか」：新・単「来たか、」
6「寺内で」：「寺内で、」
7「乞食」　イメージのために置かれた人物で、ストーリー上の必要性は小さい。冒頭の男女の囚人（⇩2頁

一通り挨拶が濟むと、要吉の方からいろ〳〵東京の樣子や、自分の一身の事も好い加減に取繕つて話したが、そんな遠い所の話は別に此女の興味を惹かなかつた。それが故郷の話に成ると、急に調子づいて話し出した。お絹が山林を抵當にして金子を借り樣として居ることも、ちやんと聞いて知つて居て、お絹さんにもあれでは困ると繁冗く繰返した末に、「自宅へは些とも相談に見えたことは無いし、此方から口出すのも變ぢやで見ては居るが、全體お前さんは如何する氣ぢやな」と言つて、口を結んだ。

自分の親の不始末を明らさまに並べられて、要吉は何とも言へなく成つた。隅江もはら〳〵して聞いて居たが、

「阿母さん、そんな事まア言はんでも宜しいがなも、彼方の阿母樣の爲やすことぢやで。」

「言はんならんがえ、お前。自宅だつて面目ないぢやないか」と、萎む氣色もない。

要吉は逃げ出したい樣な心持がした。

3–4の注）にも同様のことがいえ、こののちも多用される手法である。特に「乞食」やそれに近い人々が頻出するところには、ダンヌンツィオ『死の勝利』の影響も考えられる（⇩補注43）。

8「それを」：「それを見て」

8「吠える。」：「吠えるのだ。」

8「女が手を・・・遣つた。」：「手を出して、盆の米を嚢の中へ明けて遣る女がある。」

9「内からしッ〳〵と」：「しッ〳〵と内から」

10「それでも」：「それでは」

10「却々吠え止まぬので、」：新・単「仲々吠止まぬので、」

10「出て来たが、」：新「出て来たが、要吉を見て。」：明・岩「出て来たが、男の姿を見て、」

12「要吉は・・・寄つた。」：0

44頁1「自宅」：新・単「宅」

2「吠え着く」：新・単「吠着く」

2–3「仕舞ひます。」：新・単「仕舞ます。」

4「斯う」：「と」

4「前に」：「前へ」

4「入つたが、」：「這入つたが、」

6「明るい。」：「明るい世界が見える。」

7「今迄其処で」：「直ぐ其処で」

8–9「針箱だの糸巻だの」：新・単「針箱だの、糸巻だ

五

日が落ちてから急に風が生暖かく成つた。要吉はのそりと我家の閾を跨いたが、如何したのか、未だ灯火が點いて居らぬ。家の中が閑然として、隅々が薄暗い。立つたまゝ一寸思案したが、又引回して戸外へ出やうかとも思つた。途端に襖の向ふで、どさ〳〵と物の倒れる音がして、ひいと忍音に女の泣く聲が洩れた。何やら皺嗄れた男の聲で罵つて居る。要吉は驚いて一足下つたが、女の泣聲がお絹だと分つたから、矢庭に合の襖を開けて飛び込んだ。

「要さか、好え所へ戻つてお呉れだ」と、お絹は我子の足許へ轉び伏した。

「如何したんです、阿母さん」と、要吉は急込んで訊れた。

「如何も斯うもない、ひ、人を打つたり蹴つたり、私や、私や斯んな目に逢ふ覺えはない、覺えはない。」お絹は涙が喉に詰つて、言ふ事が能く聞取れない。

相手の男は云ふ迄もなく例の老盡工であつた。それ迄は火鉢の向角に中腰に成つていきり立つて居たが、要吉の顔を見ると流石に萎むで見えた。餓に挨拶も出來ないと見えて、澁い面を

の、」

11「勧めたので、」：「進めたので、」

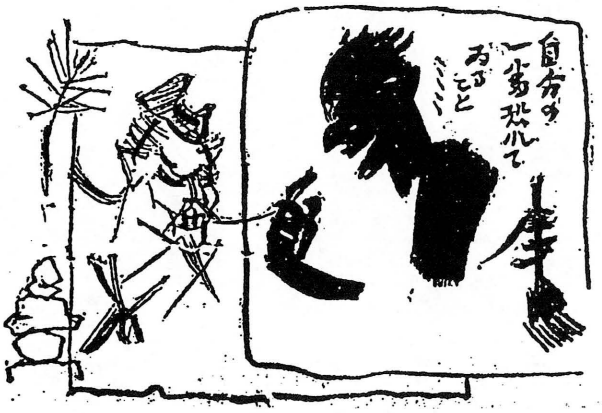
12「でしたが――」：新・単「でしたが。」

12「無かつた。」：明「無かつた――。」：岩「なかつた――。」

45頁1「まア」：新・単「それでもまア」

2「可えがと、」：「可いがと、」

挿絵（16）：「四の三」（一月一六日）



しながらもぢ〳〵と尻を卸した。要吉は二人の顔を見較べたまゝ、啞の様に茫然突立つて居た。何か言はうとしても、舌が上顎に密着いた様で聲が出ない。

お絹は其處へ倒れたまゝ肩で息して居たが、急に向直つて、「さ、要が來たに、要と直接に談して見るが可え。私は要の言つたことを取次いだだけぢや。さ、談しなさらんか、談しなさらんか」と詰寄せた。それでも相手が何とも言はないのを見ると、又はら〳〵と涙を零して、「私やな、これ迄貴方の言ひなさる事を一度だつて諾かなんだことは無い。貴方のためには、要の手前や世間へも氣兼して、何の位心配して來たか知れん。此頃始終身體の工合が悪いのも皆貴方の爲ぢやないか。それを思つたら一度位都合が出來んかとて、こんな無法な目に會はすと云ふことが——」

「それぢやで無理に捺へて呉れとは言やせなんだ」と、男は大きな聲で押破せるやうに言つた。「お前が確に出來ると云つたので、先方とも約束したのぢや。それを今更そんな女や子供の言ふ様なことを言つて破約が出來ると思ふか。れ、要吉、左様ぢやないか」と、此方を向いて、急に聲を優しくした。「お前にも好く話をせにや分らんが、ま、聞いてお呉れ。」

2「知れませんわなも。」：新・単「知れません。」

＊ 隅江の語る言葉の方言性を際立たせる加筆・修正の一例（⇩11頁5行の注）で、その強化は岩における改稿まで続く（⇩46頁8の注）。後段（118頁）で再登場してのちも、隅江の台詞には一貫してこの「なも」が付加される。東京の女お種、またとりわけ上流の知的女性朋子との対照が狙われていることは明らかだが、岐阜の諸場面では、要吉の言葉が不自然なまでに方言を欠くことと鮮烈な対照をなす。隅江の岐阜弁は「要吉自身の影の声である」とは小島信夫の洞察（『私の作家評伝』新潮社、一九七二、23頁）。

5「最う」：新・単・岩「もう」　「最う」と「もう」、および「最」と「も」の書き替え（⇩2頁5）はやや不規則だが、岩での改稿として「最う」の「もう」への書き替えは一貫しているので、以下これについては注記しない。

8「膨んだ」：新・単「膨れた」

9「退いた。」：「引込めた。」

11「咎めもした。」：新・単「咎めて成らぬ。」

12「睡つた」：新・単・明・岩「眠つた」

46頁1「お夏ちゃん」　夏子をいう。モデルは森田夏子。⇩3頁8行の注。

2「未だ・・・のか」：新・単「頸が未だ据わらぬので、」

4「男の」：「要吉の」

5「親の顔を」：0

53

「いえ、聞くに及びません」と、要吉はわな〳〵震へながら言ひ放つた。先刻から一刻も座に堪へないやうな心持がして居たのを、自分の前をも憚らないで母親を呼捨てにして、我物顔に振舞はれては、最う我慢が出來なく成つたのだ。「何んな話か知らんが、今夜は聞いてゐ暇が有りません。談話がしたかつたら又出直して來て下さい。」

「さう、お前までが左樣言やア仕方がない」と、男も顏色を變へた。「だが、全體お前は私を何だと思つてゐんだ。え、思ひ當ることは無いかの。」

要吉はぎよつとした。若し此男がお絹に對すると同じ樣な明らさまな態度で、自分に對する樣に成つたら、今此處で此胡麻鹽頭の頸筋の肉の厚い老爺の口から、自分の一番恐れて居ることを——實際の親だと云ふことを言ひ出されたら如何しやう。如何することも出來ない。一度そこへ考へ及ぶと、何とも云はれぬ憎惡の念がむら〳〵と湧いて、夢の中で魘される樣に、手足が自由に利かないやうな氣がした。何がなしに早く此滑稽な幕が閉ぢて仕舞ひたく成つた。

「早く歸つて下さい。何でも可いから早く歸つて下さい。」要吉は手を掛けて押出さむ許りにした。

7　新「四の二」（一月一五日）第一行に相当。

7、8「嘘」：「嘘」

8「為ますわね」：岩「しますわなも」　⇩45頁2の注。

10–12「「お前、子供が・・・笑はなかつた。」

＊　新のこの部分について漱石は二月七日、草平に直接宛てた手紙のなかで、「一から六迄はうまい」としながら、「其中要吉が寺へ行つて小供に対する所は少し変也」と注文をつけた（⇩124頁10の注）。要吉のわが子への無関心ぶりが極端な形で提示され、不自然の感を拭いがたいわけだが、これも「ハムレット型の憂鬱な男」（『漱石』下、98頁）で「極端なエゴイスト」（同97、138–139頁）という性格の設定（⇩3頁5–6の注）に拘束されての作意であって、草平自身の忠実な反映ではなかったろう（⇩補注24）。

「煤煙事件」の発端となった「閨秀文学会」（⇩補注11）の生徒であった山川菊栄に、明子は事件直後、「森田先生は、子供子供ってお子さんのことばかりおっしゃって。子供ってあんなにかわいいもんでしょうか」と問いかけたといい（「生の勝利八十五年」『婦人公論』一九七一・8）、瀕死の女児、夏子を救うための奔走は漱石をして「可愛らしい男」と言わしめた（⇩補注46）。また二葉亭四迷は、事件の二ヶ月後に「森田は最う全く懐疑家で、眼中に道徳も無ければ宗教も無い男であったが唯一天地間に小児の愛だけは神秘的なものだ、と言って」おり、周囲の目には「実に可笑しくて堪らぬ程小児を可愛がってゐたさうだ」と書いている（「暗中模索の片影」。『女学世界』の特集

「歸れと言やア歸る。」

老婆工は何と思つたか棄直に立上つた。一寸お絹の方へ眼を遣つたが、其儘何とも言はないで出て行つた。

要吉は戸口まで送つて出て、茶の間へ引返さうとすると、上框の上にお絹が心配相な顏をして立つて居た。要吉は直ぐ其顏色を讀んで可厭な心持がした。

「阿母さん、灯を點しちゃ如何です。」

「あゝ。」と勢のない返辭をしたが、久らく經つてから大儀相に洋燈を出しに行つた。

要吉は暗がりの火鉢の前に坐つて、火箸の先で豆の様に成つた火を掘出しながら、次の間でお絹がこと〳〵爲せる物音を聞いて居た。

其間洋燈が來て、急に一間の中が生々と明るく成つた。お絹は如何したのか夕飯を止めると言つた。要吉は强ひては勸めず、今日行つた常願寺の樣子など氣の紛れさうな話をいろ〳〵して聞かせた。お絹は「あい、あい」と返辭だけはしたが、空耳を走らして聽いては居なかつた。そして、時々ひとりで風託相に溜息を洩した。

「両人の行為に対する諸家の論評」〈明41・5。⇩99頁1の注〉)。

さらに近松秋江は、『煤煙』単・完結後の鈴木三重吉、生田長江、田村俊子らとの合評「新人月旦　森田草平論」『新潮』大3・7）で「森田氏ぐらい穏やかな顔をして家族の人達に接してゐる人は稀れであらうと思ふ。僕は、その目撃せる事実と、世評とを比べて、実に世評を案外に思つてゐる」と述べている。現実と乖離したその「世評」には、『煤煙』の要吉のイメージによる部分が大きいだろうから、草平は一つの自己神話化に成功していたともいえる。

13「押附けた」：新・単「附けた」

47頁1-6「何故そんな・・・ない。」

＊　要吉以外の人物の視点で語られる例外的部分（⇩補注67）の一つであり、隅江（⇩3頁8の注）の性格が集約的に表現されている。Ⅱ以降の東京の場にも登場する隅江の描写は好評だったようで、鈴木三重吉は『煤煙』で一番好きなのは隅江だとして、「あゝ云ふ種類のおなごを立派に書いた例として推奨するに足る」、「非常に美しいリリックを見せている」としている（「新人月旦　森田草平論」、⇩46頁10-11の注）。また注目を引くのは、平塚明子その人が、新聞連載完結と同月にいちはやく『煤煙』を批評した「偽らざる告白　私が半生の努力に依つて得たる人生観」（『女学世界』明42・5）で、朋子にも要吉にも「同情することは出来ぬ。私は寧ろ隅江を愛する」と書いていることであ

要吉は先刻から始終それが耳について、何か言はうとしては又引込めて居たが、到頭怀へ切れなく成つて口を切つた。

「阿母さん、あの人のことが未だ心配に成るのですか、そんなに。」

「いゝえ、あんな人の事なんぞ、些とも心配してやしません」と。お絹は勉めて平氣な聲で言つたが、「只れえ、彼人も身體の工合が始終惡いのだし、今夜の樣に憤ると、屹度又お酒でも飲んで後が惡いのぢやが、誰も側で見て居て世話して遣る者も無いしれえ。」

お絹は襦袢の袖を引出して、縞と眼の隅を拭ふやうであつた。

要吉は見るに堪へない樣な氣がしたので、遽てゝ眼を瞑つた。可憐ぢやないか。如何してこんな女——左樣だ、こんな女を非難することが出來やう。飽迄わが身の因果に負けて居るのだ。この外見の弱さうな身體が續く限りは、絶えず其ために責まれて生きて居る外はないのだ。お絹は自ら知らないで左樣成つてゐる。縱し知つたところが、これだけ深く因果が根ざしては最う如何することも出來なからう。それに自分は此女の腹から出たのではないか。同じ血が脈管を通つて、同じ因果の芽が身體に宿つて居るのだ。これ迄の自分のことを考へると、大抵は目

る。

その性格造型において、草平はドストエフスキーを参照したことにふれて、『『罪と罰』のソーニャの殊勝らしさも、隅江の原型とするに足りるやうな気がした」と述べている（『漱石』下、53頁）。その「殊勝らしさ」を草平に印象づけたかもしれない部分を臆測すれば、ラスコーリニコフの独白中の「どうしてあの女たちは泣かないんだろう？　どうしてうめき声も発しないんだろう？　……なんでも人に与えながら……おとなしい、おだやかな目つきをしているじゃないか……ソーニャ、ソーニャ！　おだやかなソーニャ！」（「女たち」とはリザヴェータを含めていう。第三編第六章）といった形容や、警察署に向かうラスコーリニコフが漠たる「予感」のとおり「自分のところから五十歩ほど離れたところにソーニャの姿をみとめ」るシーンなどが挙げられる。「ということはつまり、彼の悲しい行進の間じゅう彼を見送っていたわけなのである！　ラスコーリニコフはこの瞬間、ソーニャは今や永久に自分のそばにいて、運命の導く所なら世界のはてまででも自分についてきてくれるものと感じ、悟ったのである。」（第六編第八章）。以上、引用は北垣信行訳（講談社文庫、昭46）に拠る。以下の注においても同樣。

9「作ることも」：「破ることの」

48頁1「其間」：新・単「其内」

1「振向いたが、・・・居た。」：「振向くと、隅江が此

に見えぬ因果に支配されて來た。過去の自分は其因果が造つたのだ。將來の自分も矢張左樣或行くのを免れないかも知れぬ。今夜の事は何だか自分の鏡を見せられた樣にも思はれる。而も餘り好ましい鏡ではない。

「阿母さん」と、要吉は思ひ入つた樣に呼んだ。

「あゝ」と、氣の無ささうな返辭をして、お絹は掌で顏を撫で廻した。

「そんなに心配しなさらんが可い。金子は借りることに爲ませう。今夜は最う追つかけても間に合ふまいが、明日の朝にも貴方から左樣言つて上げて下さい。」

「本當にえ」と、お絹顏のは急に輝いた。「本當に左樣してお呉れぢやと、私も安心しますがえ。」

「本當ですとも。急に要るのなら、明日にでも其手續をしたら可いでせう。」

「左樣なりや、伯父樣も彼樣は言つて歸つたものゝ、何んなに嬉しがるか。大變儲かると云ふ話ぢやものね。」

「そんな事は如何でも可いです。」

方を向いて居た。」

1-2「要吉が振返ると、」：新「要吉は見られると、」：単「要吉に見られると、」

5「要吉が・・・だとは、」：新「自分の燃ゆるやうな接吻に出会つて、息も絶え〴〵に倒れたことのある女だとは。」：単「要吉が気儘な空想をゑがく土台に成つた女だ

挿絵（17）：「四の四」（一月一七日）

57

左様言はれても、お絹は今迄と打つて變つて、にこ〳〵と子供の樣に喜んで居た。要吉は其樣を見ると涙が胸一杯に突掛けて來るのを辛と怀へ〳〵した。

お絹は不意に顔を上げて、何やら聞耳を立て、居たが、「あれ、雨ぢやないか。」

成程檐端に細々と土に泌み込む樣な雨垂の音がする。何時の間に天氣が變つたものだらう。

「もう寢ませうか」と要吉が言つた。

「左樣れ。」

お絹は雨戸を繰りに立つた。

とは、」

8「して——」：新「しまして。」：単「して」

12「左様も」：「そんなに」

12「のかな。」：「のか、」

12「会ひたがつて」：「会たがつて」

49頁1「伊勢の一身田」　真宗高田派本山・専修寺を中心とする地域。現在は津市の一部。

1「から——」：新「から」：単「から。」

4「居られない。」：新・単「居られぬ。」

4「とは言つたが、」：「と口では云つたが、」

6「種子」：新・単「種子」

6「談話」：新・単「談話」

9「云ふもの」：新・単「云ふ者」

9–10「附かぬ・・・来た」：新・単「附かない物を落した」

13「平常から」：「何時も」

50頁5「末に、」：新・単「末に、」

5、11「自宅」：新・単「内」：明・岩「自家」

7「明らさまに並べられて、」：新・単「直接に並べられて」

51頁1　**新「四の三」（一月一六日）**第一行に相当。

2「生暖かく」：「冷たく」

六

要吉は蒲團の上に起直つたまゝ、凝乎と戸の節穴から射す夜明の光を見詰めた。頸筋の邊りが汗でれたくたする。昨宵は夜通し夢に魘はれて居たものらしい。一番終ひに番場の渡船場で船から上つて稼多村を通らうとすると、十二三の女の兒の萎びた青梅の樣な顏をしたのが、犬の耳を切つては樽へ入れて鹽漬にして居るのを見た。それだけは明々と覺えて居るが、如何してこんな夢を見たのか解らない。最う一度枕に頰を押附けて見たが、寢附かれさうにもないので、起上つて臺所の方へ出て行つた。井戸端で顏を洗はうとすると、戸外は一面にひどい霧だ。冷たい清水の中へ手拭を突込んで、頭を好く冷した。少し魘つた樣な心持がする。何と思つたか帽子を被つて表へ出やうとすると、茶の間に居たお絹が、

「今御膳ぢやに早うから何處へお出だえ」と、聲を掛けた。

「うむ」と、口の中で言つた切り、戸外へ出て仕舞つた。

四方の山は霧に隱されて、遠いのも近いのも全然見えない。土手の上の藁屋が一軒霧の中か

3「中が閒然として、」：明「中が閧然として、」：岩「中はひつそりとして」
7「好え」：「好い」
挿絵（18）：「五の一」（一月一八日）

10「喉」：新・単「咽」
11「例の老画工」 ⇩18頁2の注、補注8、9。
12「萎む」：岩「ひるむ」

ら浮出して見えるが、裏口が明いてるのか、朝餉を焚く竈の火が蛇の舌の様にちら〳〵と天井迄燃え上るのが目に附く。用水について下ると、自然に土手の上へ出る。長い堤の上をすたすた歩いて見た。雫の様に凝つた霧がほてる顔に打突かると、口を塞がれるやうで息苦しい。秋も何時の間にかしつとりと成つた。蟲と河下の鐵橋を渡る瀛車の音が非常に近く聞える。

其間に朝風がそよ〳〵と動き始めた。稻葉山の黒い巔が先づ現れた。河面を見下すと、涸れ〳〵に成つた水の上を見る間に霧が剝げて行く。此邊の川は秋から冬へかけて河床が露はれて白く曝れた髑髏の様な石がごろ〳〵轉つてゐる。河原の向ふはひろ〳〵とした枯野で、野火でも焚いたのか一面に黑く見える。野原の中を細い徑が曖つてつゞく。人を埋めに行く道だ。枯野の奥は村の三昧である。三昧の樹立には未だ薄い霧が殘つて居るやうに見えた。

それを見ると、要吉は急に其處へ行つて見たくなつた。で、直ぐに土手を下りて、着物の裾をからげて、素足で膝迄ある秋の水を渡つた。それから石河原を横倒しに走つて、間もなく目指す林へ着いた。

林の中はたゞ石の様に寂かで、木の葉一枚動かない。鳥も啼かぬ。人間が今息を引取るとい

52頁9「ことが――」：新・単「ことが。」
11「女」：「婦女」
12「此方を向いて、」：「此方向いて」
＊「此方」とは要吉の方でしかありえない。語り手と要吉の視点が一体であることを明示する一例。これがこの小説の基本的構造だが、終始一貫しているのではないことはすでに見た通り。⇩18頁10–19頁4、47頁1–6の注、補注67。
13「話」：「話し」

53頁1「震へながら」：明・岩「顫へながら」
5「私」：新・単「私」
6「え、」：「えゝ、」
7「同じ様な明らさまな」：新・単「同様な明さまな」
12「下さい。何でも」：「下さい、何でも」
13「許りに」：岩「計りに」

54頁2「一寸」：「一方」
4　新「四の四」（一月一七日）第一行に相当。
4「上框」：「上り框」
4「心配相な」：新・岩「心配さうな」
7「あゝ。」と勢の」：明・岩「あゝ」と、勢の」
7「大儀相に」：新・単・岩「大儀さうに」
10「其間」：新・単「其内」：岩「そのうち」
13「そして、時々」：新・単「そして時々」

ふ部屋へ迷ひ込んだやうな心持である。要吉は足を緩めた。

其時ふと人の近寄る氣色がしたので、立停つて頭を上げた。身丈の圖抜けて高い大男が、默つて前に立つて、凝乎と要吉を見卸して居る。それが何處やら懶る相で、頭髪の延びた工合と云ひ色澤の惡さと云ひ、見るのも不快で、而も見すには居られないといふ顔であつた。着物は此邊の百姓に似合はない絹布を重れて着てゐるが、帶は細帶で、素足に冷飯草履を穿いて、帽子を被つて居ない。眞當面に頭の上から要吉を見据ゑたまゝ動かうとせぬ。要吉も氣味の惡い男だとは思つたが、路の左右は丈の長い草が露に濡れて生えて居るので、これも道を譲らうとはしなかつた。暫らく無言のまゝで互に眼を見合せて居た。何と思つたか件の男は踵を回して元來た方へ戻り出した。要吉は少時惘れて突立つて居たが、其男の姿が見えなく成ると急に思出した樣に跡を追ひかけて見た。小徑が喰ひ違つて四辻に成つた處まで駈けて行つたが、其時はもう何處へ行つたのか、怪しい男の姿はかいくれ見えなかつた。延上つて彼方此方と見渡しても、矢張影さへ見えない。何處かへ隱れたのぢやないかと思ふと、更に薄氣味が惡く成つた。

「狂人かも知れない」と呟いた。

13「屈託相に」：新・単・岩「屈託さうに」

55頁1「それが」：「夫が」　単での改稿として「夫」を「それ」に替えることは一貫しているので、以下では特に必要のないかぎり注記しない。

5「彼人」：岩「あの人」　「彼」の「あの」への書き替えは岩に一貫しているので、以下では特に注記しない。

8「瞑った。」：新・単「瞑った。」

9「左樣だ、」：新「然うだ、」：岩「さうだ、」

9「わが身の因果に負けて」：新「己が身の罪に負て」：単「わが身の業に負けて」

9、11、13、56頁1「因果」：新「罪」：単「業」

＊ 新・単の再度の書き替えがこの部分で一貫している。「罪」→「業」→「因果」という段階的変更には、現在「左樣成つてゐる」ことの因をどこに帰すかについての考え方の重点が、個人としての責任から、個人の力の及ばない外的な力へと移りつつあることの反映を見ることも可能だろう。そしてその不可抗的な力は、「同じ血か脈管を通つて」自分の「身体に宿つて居る」という言い方が示唆するとおり、「遺伝」の力として考えられ、怖れられている。⇩33頁6-9の注、補注5。

55頁10「責まれて」：明・岩「苛まれて」

11-12「最う」：新・単「既う」：岩「もう」

12「血か」：新・単・明・岩「血が」

13「通つて、」：新・単「通つて、」

林の中の小徑で見慣れぬ男に邂逅した。只それだけの事に過ぎない。それだけの事が何だか不祥の意味が有る樣に思はれて、要吉は何うも心特が好くない。こんな事に頭を惱ますのは愚だと思ひながら、矢張其男のことが氣に掛つて成らぬ、あの顏、あの眼の色・如何も一生忘られ相に無い。何故だらう。俺は如何かしてゐるなとも思つた。

三味は林の緣に在る。荒れ果てたもので、何處からが墓地の地境と云ふこともない。只道がやゝ廣く成ると、枯れた芒や茅萱に圍まれた少許りの平地があつて、正面の堂の中に三體の石佛が安置してある。眞中に雨曝しの石の蓮臺を据ゑたのが、半ば草に埋まつてゐる。葬禮の時には此上へ棺を載せるのだ。村に棲む者は、男も女も、早晩この蓮臺の上へ昇き据ゑられる運命を擔つてゐる。一人も殘されない。要吉は一寸其側に立つて見渡したが、直ぐ祠堂の裏手へ這入つて行つた。

そこは一面の卵塔婆で、此中に要吉が父祖の墓も在るのだ。尤も要吉の家には先祖といふものが無いので、二三代前まで位の所でなけりや、何れが誰の石碑やら分らない。只父の石塔だけは久しく捨て置いて近年漸く建てたので、新しいから直ぐ分つた。

56頁2-3「今夜の・・・鏡ではない。」

＊ 母に「自分の鏡」を見るところに、「遺伝」という科学への信仰があることは明らかだが、それを「余り好ましい鏡ではない」とする語り手と要吉の意識が、作品全体の主題と雰囲気に密接に関わる。⇩補注5、6。

4「樣に」：新・単・岩「やうに」

挿し絵（19）：「五の二」（一月一九日）

5「あゝ」と、気の」：「あゝ」と気の」

6「最う」：新・単・岩「もう」

要吉は父を知らない。知らないだけに其當體を理想化して居た。固より神も佛も信じない。けれども父の靈魂だけは、自分のためには今尙存在して、常に自分と精神との交通が有る、有得るといふ考へは始終去らなかつた。父が晩年世間と懸離れて生活したのも、永く自分一人の心に生きむが爲であると思ふことさへ有つた。其後父子の關係について、いろんな疑はしい事實を知るに伴れて、却て自分は何處までも父の子である、少くとも精神上に於ては、自分は父が唯一の眞の子であると、堅く思ひ詰める樣に成つた。今朝此處へ來たのも、暫しの間全く他の關係を離れて、世の中に父と唯二人居るやうな心持に成つて、心ゆく限り泣けたら泣いて見たかつたのだ。

それが來て見ると、其儘石塔の前を素通りした。父の戒名と并べて、石に刻んだ何々信女といふ朱文字が眼に映つたからだ。恐らくお絹の思案ではあるまい。寺の坊主か何かの細工であらう。縱令お絹の心から出たとしても、世間の人が左樣するから自分も左樣するものだと思つたのだらう。それは如何でも可い。只要吉は此兩人の名を並べて見ることが迚も堪へられなかつた。

6「追つかけて」：新・単「追かけて」
7「遣つて」：新・単「上げて」
8「本当にえ」：新「真実にえ」：単「直実にえ」
8「お絹顔のは」：新・単・明・岩「お絹の顔は」
8「本当に左様」：新・単「真実に左様」
8–9「しますがえ。」：「しますがねえ。」
10「本当ですとも。」：新「真実ですとも。」：単「直実ですとも。」
11「彼様は」：新・岩「あゝは」

57頁2「辛と」：岩「やつと」
3「居たが、「あれ、」：新・単「居たが、／「あれ、」
4「細々と・・・様な」：「有るか無きかの」
4「天気が変つたものだらう」：新「天気模様が変つたのだらう」：明・岩「天気が変つたのだらう」
6「左様ね。」：新「然うね。」：岩「さうね。」
7「**四の四**」（一月一七日）了。　＊　この日の鈴木三重吉の鈴木周作宛葉書に「此頃の朝日の煤煙は傑作だ。作者曰く予は文体を山彦千鳥より取るところ多しと三重吉たるもの何ぞ煤煙以上の大作なくして可ならんやだ。大いにもだえてゐる」（『漱石研究年表』501頁）。「千鳥」（明39・5）、「山彦」（明40・1）の好評、漱石による称賛によって三重吉へのライヴァル意識を掻き立てられたことを草平は隠していない。特に「山彦」が脱稿直後の木曜会で朗読された際には「三重吉が羨ましかつた。うづ〳〵する程羨

昨宵の光景がまざ〳〵と眼に泛んだ。如何思つたとて、自分は父の子で無いかも知れぬ。自分の存在には始めから汚點が打たれたのだ。其汚點は肉體の中に潜むで居るのだから、自分を滅さない限りは如何することも出來ない。この手、この指、皆不義の結晶に外ならぬ。いかにも獸的だ。併し人間が生れるなぞと云ふことは、元々餘り禽獸と選ばない。何れにしても五十歩百歩だ。「自然は破倫なり。」人間の事は要するに此一語に盡きてゐんだ。斯う云ひ放つて見ると、何だか世界を異樣に塗つて遣つたやうな氣もする、只それに依つて心は少しも浮立たない。如何することも出來ないからだ。今在る狀態はそれに依つて少しも動かないからだ。總ての人類が呪はれた所で、呪ふ者はそれに依つて幸福とは成らない。

要吉は墓地の外へ出たまゝ茫然立つて居たが、何處へも行く處が無いやうな氣が仕出した。人間は何處かへ行かなけりや成らぬ。けれども父を埋めた墓場へ來てさへ、自分の手を取つて呉れる者が無いとすれば、他に何處へ行く處が有らう。何處へも行く處がなくて、それでも未だ死れなけりや——急に癇氣がして、そつと爪先まで蒼褪が通つた。

何の的もない。要吉は只眞直に自分の前の笹葉を掻分けて這入つて行つた。思ひ掛けないこ

ましかつた。・・・そればかりでない、だん〳〵読み進んで行く」間にすつかり三重吉の文章の持つ清新な魅力に圧倒されてしまつた。・・・この作者が早くも『草枕』の調子を取り入れてゐるのを及び難いとさへ思つた。」（『漱石』上、258頁）

58頁2　新「五の一」（一月一八日）第一行に相当。

3「ねたくた」：明・岩「ぬたくた」

3「魔はれて居た」：明・岩「魔はれた」

4「穢多村」：明「□□村」　明（一九二七）および『現代日本文学全集』（改造社、一九三〇）版で伏せ字。岩（四〇）で元に復している事情は前出「新平民」の場合（⇩8頁8の注）と同じ。

4-5「穢多村を・・・居るのを見た。」

＊　犬の耳を塩漬けにする少女というこの夢に、漱石の序文（単）が言及している。『煤煙』前編（本書のI）では事件が「びし〳〵と並んで寄せ掛ける」ため読者は「苦しくて息を継ぐ余裕を著者から与へられない」ほどだが、それは各事件が「尋常なものでな」く「悉く飛び離れて強烈な色彩を有してゐるもの許りである」ことにもよるとし、「主人公は一場の夢に至る迄、何か天下を驚かす様な内容でなければ気がすまないのだとしか解釈出来ない」、そして「事件が是程充実してゐる割に性格が出てゐない」と批評している（⇩補注10）。

夢のなかのこととはいえ、少女のこの行為を要吉が見た

とには、其處に二畝ばかりの畑が開墾されて、ひよろ〳〵した莖の赤い蕎麥が小さい白い花を着けて居た。そこへ瘠せた灰色の汚ない野良猫がつか〳〵と出て來て、要吉の顏を狡猾さうな眼附で眺めて居たが、又彼方の藪陰へ走つて行つた。要吉は何心なく猫の驅けて行く跡を見遣つたが、偶と又最前の男のうしろ影を見附けた。畑の方へ差出した百日紅の人の腕ほどある枝へ紐を懸けて、其端を結び合せて居るらしい。何を爲るのかと、要吉は息を凝らして見て居たが、稻妻の樣に其意味が頭へ閃めいたかと思ふと、自分でも知らぬ間に飛出して、男の肩をむづと掴むで居た。

「何を爲るんだ、たかしな事を爲ちや不可い」と、思はず大きな聲で叱り附ける樣に言つた。

男は振回つて、例の險しい眼でぢろりと要吉の顏を見たまゝ、何とも言はない。

「たかしな、異しな事を爲ちや不可いぢやないか」と、要吉は同じことを繰返した。

其時男は始めて口を開いて、

「如何してだ」と只一言反問する樣に言つた。

要吉は水を浴せられた樣にひやりとして、其低い聲が一時に腦天まで泌み渡つた。成程人間

挿絵（20）：「五の三」（一月二〇日）

場所を作者が「穢多村」としたことについて、桑原律は「森田草平が当時の被差別民に対して抱いていた否定的イメージが、いわば心象風景としてはからずも描き出されている」とその問題性を指摘している。平塚正雄『濃尾史譚』に拠りつつ桑原が述べる通り、この地域の被差別民が「屠畜」に関わった記録はないし、「屠畜」自体にもそうした工程はない以上、そのような行為を被差別民のものとし

が此婆婆に厭いて死んで行くのに、他人がそれを妨げて、縱令一瞬間たりとも生を強ふる權利が何處にあらう。自分の思慮が足らぬ所から、許し難い越權の處置を他のヒューマン、ビーイングの上に加へた樣に思はれて、少時口籠つたまゝ返答が出來なかつた。やがて氣を取直して、「死んで不可いと云ふ理由は勿論無い。只私の眼に留つたから不可ないと云ふんだ。人間は他人の目前で自殺することは許されない。」

「左樣か」と言つたまゝ。男は周章る容子もなく、徐に枝に懸けた紐を外して、丸めて袂へ入れた。それから要吉を尻目にかけたまゝ、ぺた〳〵と草履の音をさせて、彼方へ歩み去つた。

今度は跡を追つて見る氣もなかつた。少時茫然と突立つて居たが、空も林も畑も見えない。心は次第に底の知れない淵へ沈んで行く樣である。やがて氣がついて、男の立去つた後から自分も器械的に林を出たが、それから半時間後には、何處を如何して歩いて來たか、家へ歸つて井戸端で足を洗つて居た。お絹は惘れた樣な顏をして見て居たが、要吉の唯ならぬ顏色に恐れを抱いて、何處へ行つたかとも訊かなかつた。朝飯の膳を拵へて勸めて見ても、要吉は頭を振つて欲しくないと言つた限り、座敷へ這入つて夜着を引被つて寢て仕舞つた。

て描いたのは「責めを負うべき大きな誤謬であった」（『森田草平と部落問題―日本近代文学の一断面―』〈⇩8頁8の注〉46-48頁）といえる。草平の部落問題への関与については、⇩8頁8の注、補注26。

7「ひどい霧」：「えらい霧」
8「手拭」：新・明・岩「手拭」
9「お絹が、／」：単「お絹が、［改行なし］」
10「今御膳ぢやに」：「今朝御膳ぢやに」
12「土手の上の」：「土手の只上の」

59頁1「ちら〳〵と」：「てら〳〵と」
2「自然に」：新・単「自然に」
3「打突かる」：新・単「打着かる」
4「轟と」：新「轟と」：単「轟と」
7「すた〳〵」：新・単「すた〳〵と」
7「ひろ〳〵」：新・単「ひろ〳〵」
8「啜つて」：明・岩「蜿つて」
13「寂かで、」：明・岩「寂びて、」

60頁2「立停つて、」：新・単「立留つて」
2「身丈」：新「身長」：単「身長」
3「懶る相で、頭髪」：「懶るさうで、頭髪」
4「云ひ色沢」：新・単「云ひ、色沢」
5「冷飯草履」　藁緒のままの粗末な藁草履。
5-6「帽子を」：新・単「帽子は」

何うも盛苦しくて迚も寝附かれ相になかつたが、何時の間にか寝入つたと見えて、眼を覺したのは午後の日影も大分薄く成つた頃であつた。眼が覺めて見ると、身體は綿の様に疲れて、額に手を當てると燬けるほど熱い。少し頭を動かしてもづきんと痛む。そこで成るべく靜として仰向けに成つて居たが、臺所の方へお倉が來て、何やら息を喘ませて談して居るらしい。お絹も聞いて居ながら、返辭の様子が少し周章て居るやうだ。襖が開いてるので、二人の話聲が此處まで筒抜けに聞える。始めはそれが耳觸りに成つて煩さいと許り思つて居たが、偶と一言思ひ當ることが有つたので、急に肘を立てゝ耳を澄した。

「内の與三松が死骸を釣込んだ所まで見て來たと云ふが、彼所の主婦さんも娘もそりや平氣なもので、涙一つ零さなんださうな。」

「ま、それでも如何いふ人達ちやらう。」

「左樣ちやろか。娘だつて連子だと云ふし、主婦さんだつて何うせ金に惚れて隨いて來たのに違ひないもの。私も一度しか會つたことはないが、一寸見てもそりや一物ありげな女さな。これからは彼處の内も皆あの主婦さんの仕たい儘ちやで、折角建てた家も藏も賣拂つて戻つて行

6「真当面に」：新・単「まともに」
8「居た。」：「居たが、」
9「居たが、」：「居た。が、」
9「成ると急に」：「成ると、急に」
10「追ひかけて」：新・単「追かけて」
10「成った所」：「成ってる所」
11「延上って」：「延び上って」
11「かいくれ」　搔暮。まったく。さっぱり。
挿絵（21）：「五の四」（一月二一日）

61頁1　新「五の二」（一月一九日）第一行に相当。

67

くぢやろと云ふ噂ぢやが、それかと云つて、誰一人物の言ひ手は無かろ」と言ひかけて、お倉はひとり失笑し相にした。「いゝえ有るの。只一人有るんぢやさうな。あの乘ツさの許の噂衆なも、彼の女の今日の周章方といふは無かつた相ぢや。」

「あの女がえ、左様かな。」

「乘ツさは親身の兄でもお仁善しぢやで何も言ふまいが、彼のお辰さと云ふが却々利かん氣ぢやでなも。七五郎が村を逃出してから、去年臺灣で大金儲けて歸つて來るまで、十年の餘も盲目の親を引受けて面倒見て來たのぢやもの、切めて七五郎が一日でも煩つて寢て居たりや、どうせ他人に遣つて仕舞ふ身代なら、幾許何でも半分や三つ一は兄弟に讓つて死にさうなものぢやつて。遺書でも無いかと家中捜したんぢや相なが、書いた物は何一つ無いし、死人に口無し、如何したとて彼處の身代はそつくり彼の主婦さんと寢の物に成るんぢやとさ。それでもお辰さは未だ未練が有つて、親類を一軒々々頼んで廻つても口利いて貰ふ積りぢや。此方の言分が通らん間は葬禮も出させんて、一人で力むで御座るさうなが、御葬禮が出んと、自宅の阿父さが困るだけさな。」

1「邂逅した」：「邂逅した」
1「それだけの事が」：「けれども夫だけの事が」
4「相に」：新・岩「さうに」
4／5＝0：「［改行なし］足許の径が広く成つたので気が附くと、何時の間にか墓地へ来て居た。／」
6「茅萱に囲まれた」：「茅萱の中に」
7「安置してある。」：「安置してある、」
7「据えたのが、」：「据える。」
7「埋まつてゐる。」：「埋まつてるが、」
8「昇さ据ゑ」：新・単・明「昇き据ゑ」：岩「昇ぎ据ゑ」
9「祠堂」：「お堂」
11「卵塔婆」　墓地。「卵塔」は墓石の一種で、座台の上に卵形の石塔婆をのせたものだが、転じて一般に墓石をいう。
13「直ぐ」：「直」

62頁1–8「要吉は・・・見たかつたのだ。」
＊「伯父様」への嫌悪の対極に、亡父を「理想化」して「精神上の交通」を保つ主人公の心理を描く手法は、『煤煙』への影響の最も顕著なダンヌンツィオ『死の勝利』（⇩補注23）の主人公ジョルジョが知的・瞑想的で憂鬱味を帯びた亡き叔父デメトリオを精神上の父とし、淫蕩な俗物の実父を蔑むという設定に酷似している。「多分、僕は父を愛したことがないのかもしれない」／デメトリオこそ

お倉は一人でのべつに饒舌つた。

「左樣だがよ」と、お絹は矢張浮かぬ聲音をして、「まア如何しで無理に死ぬ樣な氣に成れたんぢやらうか。金子は有るし、縁請はつい近頃出來上つた許りぢやと云ふし、何が不足でそんな心を出したもんか。」

「それがなも、誰でも解らんと言つてだがな。あんなに田地を買つたり、金子を貸したりして、立派に遣りかけたのぢやが、誰一人近しう交際つた者は無いさうな。それに樂ッさは彼樣云ふ人だしなも、側に居る主婦さんや嫂でさへ全然氣が附かなんだと云ふのぢやもの、他人に解らう筈はないわな」と言つて、一寸首を傾げたが、「だけど、人の死ぬのは大抵解の分らんものぢやぞな。」

お絹は思はず溜息を吐いた。

「ふら〳〵と左樣云ふ氣に成ると、自分で承知して居ながら、如何しても後へ引けんと云ふでな。何にしても人の生命程分らんものはない。」

そこへ要吉が蒼醒めた顏をして奥から出て來た。お絹はそれを見ると、

は彼の真の父親であつた。彼の唯一の真の血縁であつた。」（第二部第六章）。「「僕にとっては彼は今も生きている」ジョルジョは考えた。「・・・要するに、他のすべての人間の生命の中にあって、彼の生命の全指標は、今僕に結びついている精神的絆の中に、集収され、統一され、集中されるように思われた。彼は今や他のすべての接触とは無関係に、僕とだけ交流しながら、僕の中にだけ存在する。・・・」（同第十章。引用は野上素一訳『死の勝利』〈岩波文庫、一九六一〉。以下断りのないかぎり同様）。『死の勝利』をめぐっては、⇩109頁10–110頁2の注、222頁6–8の注、補注8、23、43、50、58、63。

6「成つた。」：明「成るた、」：岩「なつた、」

7「離れて、」：明「離れた。」：岩「離れた、」

12「見ることが」：「見ることは」

63頁5「破倫」：「不倫」

6「只それに」：「只、それに」

9「立つて居たが、」：「突立つて居たが、」

10「人間は・・・成らぬ。」：「人間は・・・成らぬ。」」

13 **新「五の三」（一月二〇日）**第一行に相当。

13「的」：「目的」

13「笹葉」：「笹葉」

13「思ひ掛けない」：「思ひがけない」

69

「まア好う寝むでぢやつたな。何處か悪いのぢやないかと心配して、三度も見に行つたがな。朝から何も喰べんぢやで、屹度お肚が空いたらうに。」

要吉は手を振つて制した。御飯は未だ欲しくないと言ふ積りであつたが、口の中が乾燥いで聲が能く出なかつた。お倉は上り框に腰掛けたまゝ、要吉を見上げてにや〳〵笑つて居たが、

「要様、昨日は如何ぢやつたな。」

「如何と云ふこともない。」

「彼んなことを。それでも最う餘程大きく成つてでしたらう。」

「あゝ」

「あ、忘れて居たが、お前にとて今頃珍らしい鮎を持つて來てお呉れたぞえ」と、お絹が口を容れた。

「いえ最う昨日からお約束しといたのぢやわな」と、お倉は急に尻を上げて、「又話込むで仕舞つたが、今夜も他所村に産が有ると云つて、阿母を招びに來て居たで、私も斯うしては居られんのぢやつた。容器は又今度貰ひに來るわな。」

64頁1「ひよろ〳〵した」：「ひよろ〳〵とした」
1「小さい白い花」：「白い花」
2「痩せた」：「痩せて狐に似た」
2「狡猾さうな」：新・単「狡猾さうな」
3「行く跡を」：「行く方を」
4「百日紅」：新・単「百日紅」
4「腕」：新・単「腕」
8「・・・不可い」と、思はず」：「・・・不可いぢやないか。」／思はず」
9–11「要吉の顔を・・・口を開いて、」：「要吉の顔を見たが、此時始めて口を開いて、」
10「異しな」：岩「可異しな」
12「如何してだ」：新「如何して」：岩「何うして」
13「其低い声が一時に」：「其低い声の調子が」

65頁2「許し難い」：「許され難い」
2「越權」：新・単「越権」
2–3「ヒューマン、ビーイング」：新「ヒューマンビーイング」：単「ヒューマン　ビーイング」　human being は英語で「人間」の意。
3「少時口籠つたまゝ」：「要吉は口ごもつたまゝ暫く」
3「やがて気を取直して、」：0
4「云ふんだ。」：「云んだ。」
5／6＝0：「改行なし」要吉は理屈に成らぬ理屈を云つた。」

お倉はそゝくさと出て行つた。

その後でお絹は茶を煎れて要吉に侑めやうとしたが、お湯の方がこいふので、言ふがまゝに湯呑に注いで渡した。

「今お倉やの話ぢやが、七五郎が三昧で首釣つて死んで居たといな。今し方彼の與三松が林へ柴刈に行つて見附けたさうな。それから駐在所の巡査を招んで來るやら、村方の人が走つて見に行くやら、向うの土手は一しきり大騒ぎぢやつた。あんな人が死んで行くなんて、本當に思ひがけない。つい三四日前に伯父樣が會つて、お金子の話もしたのぢやさうなが。――伯父樣と云へば如何したのか、使者を遣つても赤だに見えぬが。」

お絹は要吉が蟬の脱殼のやうな顔附をして、自分の話を聞いて居さうもないのに氣が附くと、下を向いて口を噤んだ。

林に首縊りがあつたと聞いた時、要吉は直ぐ彼の男だなと思つた。思つただけで別に驚きはしなかつた。それが當前の樣に思はれた。自分にちやんとそれを豫期して居たのだ。お倉の話を聞いてる間も、あの男の家の樣子やら何やらが一々自分の考へて居た通りの樣に思はれた。

6「左樣か」：新・単「然うか」
6「容子もなく、」：「容子もなく」
7「ぺた〳〵と」：新・単「べた〳〵と」
7「させて、」：「させて」
8「今度は跡を追つて見る」：「要吉は今度は跡を追かけて見る」
8「少時茫然と」：「茫然として」
11「惘れた」：新・単「呆れた」
12「勧めて見たが、」：「勧めて見ても、」
13「言つた限り」：新「云つたまゝ、」：「云つた限り、」

66頁1　新「五の四」（一月二一日）第一行に相当。

1「何うも」：新・単「どうも」
2「日影も」：新・単「日影が」
2「疲れて、」：「疲れて居る。」
3「静と」：「静乎と」　岩での改稿として、この書き替えは一貫しているので、以下では特に必要性の認められない限り注記しない。
4「成つて居たが、」：「成つてると、」
4「談して居るらしい。」：「談してる。」
7「ことが有つたので、」：「ことを聞いたので、」
10「如何いふ」：岩「何ういふ」
11「左樣ぢやろか。」：「然うぢやろか、」
12「ありげな女さな。」：「ありそな女でしたよ。」

始めから彼の男の身の上を知つて居たやうにも思はれた。何の爲に死んだのか、自分だけには彼の男の心の奥まで解つてゐる。一生の間に唯一度出會つた、而も死ぬる間際に出會つた。彼の男も自分と出會はなければ成らなかつたのだし、自分も彼の男と出會はなければ成らなかつたのだ。兩人の間には眼に見えない連鎖が繋がれてあつたかも知れぬ。いや、彼の男は單に自分の心の影に過ぎなかつたのでは有るまいか。あれが自覺しない自分の半面で、如何しても離れることが出來ないのでは無からうか。實在の人間としては餘り玄妙に過ぎる、不可思議に過ぎる。要吉は自分も墓穴の中へ引入れられさうな心持に成つた。

お絹はと見ると、兩手を袖口へ引入れて火鉢の縁へ掛けたまゝ、屈託さうに俯向いて居る。その蒼い筋の張つた額を見詰めて居ると、要吉は道理もなく涙が滲み出た。

「阿母さん。」

「え」と顔を上げる。

「私は明日の朝東京へ歸らうと思ひます。」

「まア何んぢやとえ。」

67頁1「それかと云つて、」：「それぢやてゝ」
2「ひとり失笑し相に」：「失笑しさうに」
3「無かつた相ぢや。」：新「無かつたさうぢや。」：岩「なかつたさうぢや。」
4「あの女」：「彼女」
5「お仁善しぢやで・・・まいが、」：「お仁善だから何にも云はんのぢやさうなが、」
8「半分や」：0
9「捜したんぢや相なが、」：新・岩「捜したんぢやさうなが、」
10「成るんぢやとさ。」：「成るんですとさ。」
11「未だ」：0
11「親類を・・・廻つても」：「親類の惣代頼んでも」
11「積りぢや。」：「積りぢや、」
12「一人で」：「ひとりで」
12「出んと、」：「出なきや、」
12「御葬礼」：岩「お葬礼」
12「自宅の」：新・単「内の」

68頁3「ぢやらうか。」：「だらうか。」
3「許りぢやと」：「許りだと」
6「交際つた」：「交際つた」
8「だけど、」：新・単「だけど」
12「分らん」：「分らぬ」

72

「其人が死んぢや、金子の都合も出來にくからうから、兎に角印形は阿母さんに預けて行きます。私の立つた後で好い樣にして下さい。

「如何して、急にそんな事を言ひ出すのだえ。」

お絹は泣き出しさうな顔をして我子を見返した。

69頁1　新「五の五」（一月二二日）第一行に相当。

1「好う寝むでぢやったな。」：新「能う寝むでぢやったな、」：明「好う寝んでぢやったな。」：岩「好う休んでぢやったな。」

1「何処か」：「又何処か」

1「何も」：「何にも」

7「成ってで」：新「なってゞ」：岩「なってで」

8「あゝ」：「あゝ。」

9「今頃珍しい鮎」：「大きな鯉」

11「最う」：新・単「既う」

11「しといた」：「した」

11–12「と、お倉は・・・「・・・今夜も他所村に」：「と云ったが、急に立ち上がって、「左様だ、今夜他所村に」

12「来て居たで」：「来てたから」

13–**70頁**1「ぢやった。容器は・・・お倉は」：「ぢやった」と、お倉は」

2「侑めやうと」：新・単「勧めやうと」

6「向うの」：新・単「向ふの」

6「本当に」：新・単「真実に」

7–8「――伯父様と云へば」：「伯父様は」

8「遣っても未だに見えぬが。」：「遣ったが、未だ見えぬがなア。」

挿絵（22）：「五の五」（一月二二日）

11–71頁7「林に首縊りが・・・成つた。」

＊　七五郎とのこの奇妙な同一化の心理は、要吉のお倉への親近感とも関連しつつ、Ⅱに登場する女主人公、朋子との同類意識に重ねられてゆく。⇩300頁3–4の注、補注26。

70頁11「林に首縊りが」：「要吉は首縊りが」

11「時、要吉は直ぐ彼の男」：「時に、直に彼(あ)の男」

13「あの男」：「彼(あ)の男」

71頁5「あれが」：0

6「出来ないのでは」：「出来ないのぢや」

6「余り」：新・単「余りに」

7「墓穴」：新・単「墓穴(ぼけつ)」

13「何んぢやとえ。」：「何(なん)ぢやとえ。」

72頁1「其人が」：「折角其人が」

2「立つた」：「発つた」

2「下さい。」：「下さい。」

3「如何して、急に」：新・単「如何して、如何して急に」

4　**単行本第一巻終了。**　⇩補注10。

73

七

要吉は與三松一人連れて、未明に村を立つた。長良の橋を渡る頃、月の色が次第に薄白く成つて、四邊は一層仄暗い闇に包まれた。夜明が間近く成つたのであらう。

暗がりに來て、又暗がりに去る。何うやら身に後暗い事でもあつて、わざと人目を避けて故國を出るやうな氣がした。與三松は水洟を啜りながら默つて隨いて來る。二人の足下に橋板が高く鳴いた。

町へ這入つても未だ人通りはない。監獄署の塞は寂然として、黑い板塀が一しほ高く見えた。それを出外れやうとして、與三松がふつと提灯の火を吹き消した。薄い烟が一條横に靡いて、蠟の臭ひが鼻を打つ。何時の間にか、夜は白々と明け離れて居た。

やがて停車場へ着く。要吉は與三松の手から荷物を受取つて、

「最う可いからお歸りな。」

「へえ。」

Ⅱ（単行本第二巻相当部分）

単行本第二巻本文開始の前頁に色刷り（青）で以下の文章。「「煤烟」第二巻の発行が此様に後れたのは、主として著者の責任である。著者が第二巻の大部分を新たに書直してそれが為に発兌の時期の逸するをも顧みなかつたからである。何故「煤烟」の様なものに、それ程心血を注ぐかと問はれたら、著者は答へる所を知らない。」

73頁1–77頁6：0　新に相当部分なし。つまり単における加筆。

73頁1「七」：単「一」

4–5「故国」：単・明・岩「故国」

8「ふつと」：「ふつと」　平かなに傍点を振った語について、岩での改稿として傍点をとってしまうことは一貫している。以下では特に必要と認められない限り注記しない。

74頁4「許り」：「計り」

6「容子は」：明・岩「容子が」

7「隅江さ」：岩「隅さ」

7「嘸」：明「嘸ぞ」：岩「さぞ」

7「所為」：岩「せゐ」　岩での改稿として、この書き替えは一貫しているので、以下では特に注記しない。